

Advanced Suqad Leader Starter Kit

**Vehicle and Ordnance
Historical Notes**



**SK#2
GUNS!**

**SK#3
TANKS!**



**EXP#1
MORE GUNS!
MORE TANKS!**

H 章 車両と砲兵器ノート

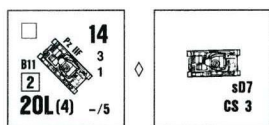
ASL ルールブックのH 章における『車両と砲兵器ノート』は、ASL システムで機能するいくつかの特殊な兵器の重要な特徴を述べているばかりでなく、WW2 の戦闘に参加した砲や車両の単一の資料ではベストなものの1つとして広く知られています。ここでは、ASL SK#2, SK#3, エキスパンションパック#1 (EXP#1) に登場する車両と砲兵器ノートをASL スタンダードそのままに再録していますが、ASL SK では機能しないルールはいくつか省略されています。

兵器に与えられている希少度値(Rarity Factors : RF)と基本価値ポイント(Basic Point Values)は、自作シナリオを作るためのものです。SW にはこのようなポイントは設定されておらず、自作シナリオで使用するSW は歩兵分隊の数を基準に決められます。RF は0.9(最も一般的)から1.6(最も希少)までの範囲があります。BPV は、そのユニットの相対的な価値を表します。ASL SK#3~EXP#1 に登場するAFVは、低いものでは18(スロバキア／ルーマニア軍OA wz.36)から105(独軍PzKpfwIVb : キングタイガー)ポイントまでの評価が設定されています。また、SK#2から登場している砲では、25(英軍76mmMTR)から67(独軍88mmPAK43)ポイントまでの評価が設定されています。また、アメリカ軍の6-6-7 分隊は14 ポイント、イタリア軍徴収兵HSは1 ポイントのBPV が設定されています。各車両と砲には、使用された時期と、その期間のRFが()内に示されています。

ETO とはEuropean Theater of Operations の略であり、ヨーロッパと地中海の島々の区域を示します。PTO とはPacific Theater of Operations の略であり、太平洋の区域を示します。PTO は日本軍との戦いと同義です。

なお、兵器名称についているカラーコードは、●がSK#2に、●がSK#3に、●がEXP#1に登場することを表しています。

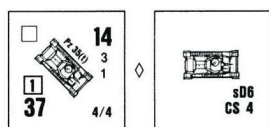
ドイツ軍 車両ノート



● **PzKpfw IIF** : 524両が生産された。使用可能期間には、ポーランド戦役の後に装甲を強化され、ゲーム上はF 型と同等なものになったより初期の形式を含んでいる。その比較的貧

弱な武装ゆえに、2 号戦車は1940 年から主に偵察任務に用いられた。この目的のために、以下の編成につき1 個の2 号戦車小隊が配属された。各戦車中隊(1942 年に廃止)、各戦車大隊、および戦車連隊(1943 年に廃止)。

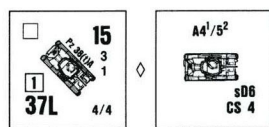
†1940 - 43 年(1.2) BPV=36



● **PzKpfw 35(t)** : 1936-39 年にかけて、チェコの主力戦車LT vz35として298 両が生産された。この他に126 両がルーマニアに輸出され、R-2 の名称で使用された。ドイツがチェコスロ

バキアを併合した際、219 両が接収され、残りの79 両は新たな“独立”スロバキア軍に与えられた。ドイツ軍はこの車両をPzkpfw 35(t)の名称で使用し、ポーランド戦役では第1 軽師団の第6 装甲旅団に、その後のフランス・ソ連戦役では第6 装甲師団に配備していた。

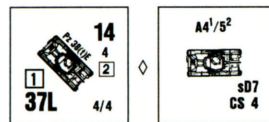
†1939 - 41 年(1.3) BPV=40



● **PzKpfw 38(t)A** : この車両はもともとは1938 年にLT vz35 の代替車両として発注されたチェコのLT vz38 である。ドイツ軍がチェコを併合した時点ではまだ配備されていなかった

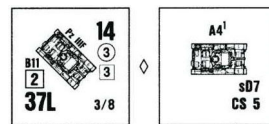
が、その際立った性能故にドイツは生産の続行を指示した。PzKpfw 38(t)はポーランドでは第1 および第3 軽師団、ノルウェーとフランスでは第7 および第8 装甲師団、ソ連では第6, 7, 8, 12, 16, 19, 20, そして22 装甲師団が使用していた。他の部隊でも使用されていた可能性もある。1941 年6 月の時点で、ドイツの装甲兵力の実に4 分の1 がチェコ製の戦車であった。A-D 型、およびS 型を合わせて565 両が生産された。

†1939 - 42 年(1.1) BPV=43



● **PzKpfw 38(t)E** : チェコ製の LT vz38 の装甲強化型で、主に東部戦線で使用された。E-G 型まで総計 846 両が生産された。1942 年から44 年にはスロバキア、1943 年から44 年にはルーマニア、1942 年6 月から45 年にはハンガリーでも使用されている。

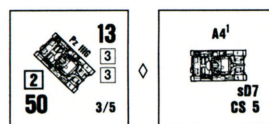
†1941 - 42 年(1.1). BPV=44



● **PzKpfw III F** : E型は大量生産を目的とした形式である。それまでの試行錯誤の走行方式を一新し、トーションバー方式の懸架装置が採用されていた。F 型は車体に若干の改修を施

した、E 型の後期モデルである。ゲームのカウンターと配備時期はE 型とF 型を合わせたものになっている。E 型は96 両、F 型は435 両が生産された(F 型の後期モデル100 両程度は50mm 砲を搭載している。これらはゲーム上ではG 型として扱う。また、E 型とF 型の生き残りは後に50mm 砲装備に換装されている。これらに増加装甲を施したタイプはゲーム上ではH 型として扱う)。1939-40年における完全戦力の3 号戦車小隊は、部隊の状況により3-5 両の戦車によって編成されていた。

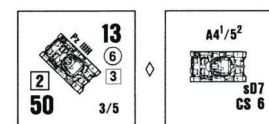
†1939 年(1.6), 1940 - 41 年(1.1) BPV=45



● **PzKpfw III G** : 1940 年8 月、ヒトラーは III 号戦車の主砲を長砲身50mm 砲に換装するように指示を出した。しかし、驚くべきことにこの指示は造兵局に無視された。造兵局では、

すでに受領テストに合格した中初速の50mm を用いることに決定していたからである。およそ550 両のG 型が製造された。1941 年には、III 号戦車小隊の公式戦力は5 両に増強されていた。この車両は、1941 年3 月から同年12 月までの期間、北アフリカでも使用されている。

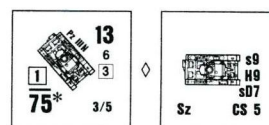
†1940年8月 - 41年(1.1) BPV=50



● **PzKpfw III H** : H型は308 両のみが生産され、もっとも一般的な3 号戦車というわけではない。しかしながら、北アフリカではその数以上にイギリス軍の悪夢となり、名声を獲得した。

なぜなら、イギリス軍の2 ポンド砲では、この車両の前面装甲を貫通するのは著しく困難だったためである。また、42 口径50mm 砲を装備して1,549 両が生産された初期のJ 型と、50mm 砲に換装され増加装甲を施した多くのE-F 型も、ゲームではH 型と同等とみなされる。そうしてみると、H 型(および同等の形式)は1941-42 年のドイツ軍戦車兵力の主力であったと考えられる。アシカ作戦(計画で終わったイギリス侵攻作戦)のために、いくつかの3 号戦車に水面下で稼働できるような改造が施された。これら潜水戦車のうちいくつかは、第18 戦車連隊が1941年6 月22 日、パトリンでブーク河を渡河する際に使用された。

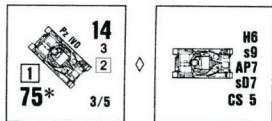
†1941 年1-2 月(1.5), 3-4 月(1.4), 5-6 月(1.3), 7-8 月(1.2), 9-10 月(1.1), 11-12 月(1.0), 1942 年(0.9) BPV=53



● **PzKpfw III N** : 50mm 戦車砲が時代遅れの代物になったため、より強力なHE 弾を射撃できる初期型4 号戦車に搭載された24 口径75mm 砲を使用して、3 号戦車を支援用車両に転

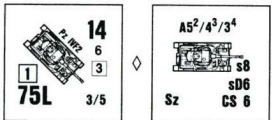
換して生産することが決定された。1943 年6 月以前の編成では、各ティガー中隊に10 両の割合で3 号N 型が配備されていた。その他は新規の各装甲擲弾兵師団に含まれる各装甲大隊に配備され、4 号戦車と同等の任務に就いた。J 型, L 型, M 型からの換装も含め、700 両が生産された。

†1942 - 45 年(1.3) BPV=55



● **PzKpfw IV D** : 229 両が生産された。フランス侵攻時において、各戦車大隊は4 号戦車装備の中戦車中隊を有するように再編成されるはずだったが、実際には5 両の4号戦車からなる小隊が1, ないし2 個と、5 両の2 号戦車が配備されていただけであった。

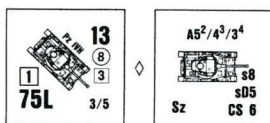
†1940 - 42 年(1.4), 1943 年(1.5) BPV=50



● **PzKpfw IV F2** : 1941 年11 月、T-34 とKV に対抗するべく、75mm KwK40L/43 戦車砲を急遽F型に搭載するよう指示が出された。1942 年6 月にF2 型が登場すると、それま

での装甲師団の主力であった3 号戦車は、より強力な砲への換装が不可能になっていたこともあり、即座に時代遅れのものとなった。F2 型はF1 型からの換装25 両を含め、200 両が生産された。ゲームにおいては、およそ1,000 両が生産された初期のG 型も同等のものとして含まれている。実際、F2 型はその後ドイツ軍内においてもG 型に名称変更がなされている。北アフリカでは、イギリス軍はこの車両をマークIV スペシャルと呼称した。1943 年になると、3 号戦車はその名称とは裏腹にもはや主力戦車とは言えない性能しか持たなかった。そのため、その年の9 月には各装甲大隊所属の中(4 号)戦車中隊を取り除き、4 号戦車中隊のみで構成された1 個大隊を編成。3 号戦車はすべて後方に下げ、今まで3 号戦車によって構成されていた大隊はパンターによって再編成する旨の指示が出された。しかしながら、この指示を完遂するにはかなりの時間を要したのであった。

†1942 年6 月(1.5), 7 - 8 月(1.4), 9 - 10 月(1.3), 11 - 12 月(1.2), 1943 年1 - 2 月(1.1), 3 - 12 月(1.0) BPV=72

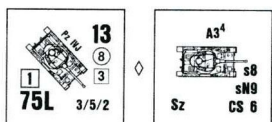


● **PzKpfw IV H** : 3,774 両が生産された。H 型は数量的にも最も重要な4 号戦車であり、戦争の後半を通じて装甲師団の主力を担っていた。ゲームのカウンターと登場時期にはおよそ70

0両生産された、G 型の後期モデル(48 口径の75mm 砲を装備し、ボルトオンによる増加装甲が車体に取り付けられていた。)も含まれている。H 型の初期モデルもボルトオンによる増加装甲によって装甲が強化されており、G 型との主たる相違点は最終減速機の変更であった。

4 号戦車とパンターD 型、そしてティーガーI の車長用キューボラの内側には、興味深い射撃支援用の回転式リングが備えられていた。このキューボラには時計と同様の1~12 までの方向と細かい目盛りが刻まれていた。砲塔が旋回すると、内側の輪が砲塔と同じ角速度で逆方向に回転し、これによって車長は車体の中心軸に対する現在の砲塔方向(戦闘中には興奮のあまりしばしば忘れられた)を知ることができた。車長はこれを用いて、砲撃目標の照準時間を短縮することができた。砲手はそのための時計の文字盤式の方向指示器を有しており、車長から指示された角度にそれを合わせるだけで、目標が照準内に収まるようになっていたのである。完全戦力の4 号戦車小隊は公式には5 両編成であったが、慢性的な戦車不足から、特別な装甲師団を除いては4 両で編成されるのが通例であった。

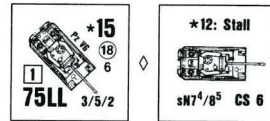
†1942 年8 - 12 月(1.5), 1943 年1 - 6 月(1.3), 1943 年7 月 - 45年(0.9) BPV=73



● **PzKpfw IV J** : J 型は4 号戦車の最終型である。砲塔旋回補助用の発動機が取り外され、代わりに燃料タンクが増設されていた。また、近接防御兵器を装備し、白兵戦への対抗力を増

していた。1,758 両が生産された。

†1944 年7 月 - 45 年(1.0) BPV=73

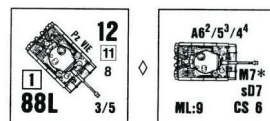


● **PzKpfw V G** : パンターD 型の欠点は最終的には克服され(後期モデルのエンジンはいまだ不安定であったが)、このパンターG 型によって、ドイツ軍戦車部隊は、WW2 最良の戦

車の一つを装備することになった。なお、ゲームのカウンターはより初期の形式であるA 型も含んでいる。その火力、機動性、装甲のバランスの良さから、この車両は連合軍にとって恐るべき強敵となった。アメリカ陸軍は、パンター1 両の撃破には5 両のシャーマンが必要であると判断していた。およそ5,000 両以上(A 型がおおよそ2,000, G 型が3,176 両)が生産され、1944 年の編成では、装甲連隊を構成する2 個大隊の1 つがパンター、もう1 つが長砲身の4 号戦車を装備していた。通常、パンター装備の大隊が第1 大隊となった。連合軍にとっては幸いなことに、この編成が万度に満たされることは稀であった。パンターも4 号戦車と同様に、特別な装甲師団を除き、公式の5 両編成ではなく4 両編成で小隊が構成されていた。

†パンターG 型が始動のための1MP を消費するたびに、その車両を指揮するプレイヤーはDR を行う。その目が12 の場合、パンターは失速を起こしたことになる、始動に失敗して移動を開始できない。その場合再びDR を行い、その目が失速時に遅延MP としてパンターが無為に消費(停止に必要な1MP を含むが、始動に用いた1MP は含まない; 例えば、始動を宣言してDR12 を出し、さらに追加DR で5 を出したパンターは、合計6MP を無為に消費してしままだ停止しているのである)してしまったMP として適用する。失速したパンターは、MP が残っていれば再度始動を試みることができるが、そのたびに失速DR を行わねばならない。パンター側のプレイヤーがこの失速DR を忘れて車両を動かしていることに対戦者が気づいた場合、パンターの移動が続いているのなら、なんらかのMP を消費した時点で失速DR を要求できる。失速した車両も、始動のための1MP を消費した時点で自身のMP を開始しているので、臨機射撃の目標になりえる。ただし、そのMP 中に新たに別のヘクスに移動していないのなら、『移動した目標』とみなされることはない。失速による遅延MP が、その車両の残りのMP を上回った場合、その車両は残りのMP を遅延に用いてMP を終えたものとみなす(超過分は無視する)。

†1943 年10 - 12 月(1.3), 1944 - 45 年(1.0) BPV=89



● **PzKpfw VI E** : ティーガーはおそらくWW2 で最も伝説的なAFVであろう。この車両が投入された当時、その“88mm 砲”(搭載した初めての戦車であった)と重装甲によって、連

合軍にとって最も恐るべき敵となった。実際、側面か後面を近距離で射撃されない限り、ティーガーが撃破されることは極めて稀であった。もっとも、その有効性はいくつかの欠点により幾分減衰されていた。過大な重量と機動性の欠如、複雑すぎる走行装置による貧弱な信頼性がそれである。ティーガーは戦略予備として独立戦車大隊に配備されていた。ただし、以下の師団には独自のティーガー中隊/大隊が編成されていた。()内は中隊編成だった時期であり、それ以降は大隊編成である。

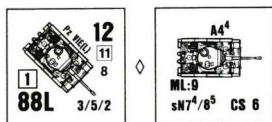
グロスドイッチェランド師団(1943 年2 - 8 月; 8 月の後半には大隊戦力が合流していた)、SS 第1 装甲“ライプシュタンダルテ アドルフ・ヒトラー”師団(1943 年1 月 - 1944 年3 月; 1943 年の7 月にはSS 第101 重戦車大隊が設立されているが、2 個中隊程度の車両しか保有しておらず、1944 年4月の北フランスでの再編成時に完全な大隊規模となった。9 月にSS 第501 重戦車大隊に名称変更。12 月にはティーガーII を受領し、ラインの守り作戦に参加する)、SS 第2 装甲“ダスライヒ”師団(1943 年2 月 - 1944 年3 月; 1944 年4 月からSS 第102 重戦車大隊向けの車両が受領され始めているが、定数を満たしたのは5 月下旬から6 月にかけてである。9 月にはSS 第502 重戦車大隊に名称変更。45 年2 月にはティーガーII を受領している)、SS 第3 装甲“トーテンコプフ”師団(1943 年2 月 - 1944 年3 月; 大隊規模への名称変更は1943 年11 月にSS 第103 重戦車大隊となっているが、実際に大隊規模の車両を受領したことはない。44 年11月にはSS 第503 重戦車大隊に名称変更。明けて45 年にはティーガーII を受領し、定数不足ながら大隊としての機能を果たすようになっていく)。上記4 つの師団のティーガー中隊は、すべて1943 年2 月におけるハリコフをめぐる攻防戦に参加している。ティーガー1 個小隊は4 両のティーガーで編成

されていた。東部戦線では1943年1月（試験的実戦投入は1942年9月に
レニングラード方面にて行われている。部隊名は第502 重戦車大隊）、チ
ュニジアでは1942年12月から（部隊名は第501 重戦車大隊）運用がしま
った。

†ティーガーの操作班は、戦車部隊の中でも選り抜き中の選り抜きであった。
ゆえに、ティーガーの操作班の士気値は9である。このことはカウンター
に“ML : 9”と記載されている。

†カウンター裏面のM7は、戦車の周囲に装着された対人用近接防御兵器で
ある、地雷射出器の使用ナンバーを表している。これは白兵戦（混戦も含
む）時において、sNと同様に使用できる。ただし火力は12であり、煙幕
の射出能力もたない。

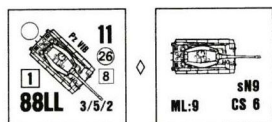
†1942年12月 - 45年(1.5) BPV=87



●PzKpfw VI E(L) : 機械的信頼性の
向上と近接防御兵器を備えた、ティ
ーガーの最後期型（Lは後期生産型
の意味）である。1944年8月に生産
を終えるまでに、すべての形式をあわせ
て1,354両のティーガーEが生産された。

†ティーガーの操作班の士気値は9である。このことはカウンターに“ML :
9”と記載されている。

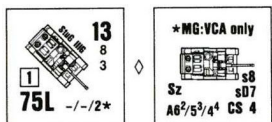
†1944年 - 45年(1.3) BPV=91



●PzKpfw VI B : ティーガーの後継
車両として、ケーニヒスティーガー
（またはティーガーII ; 連合国側はキ
ングタイガー、もしくはロイヤルタイ
ガーと呼称した）はティーガーIと同
様の運用をされた。しかしながら、その過大な重量によって機動性と機械
的信頼性はさらに低下し、防御時のみ有効性を発揮することができた。アル
デンヌ攻勢でも使用されたが、効果的な働きはできなかった。そのあま
りの重量故に起伏がちな地形を素早く走破する能力に欠け、さらには回収
車両がティーガーIIを牽引不能であったがために、些細な故障によっても
損失することになったのである。489両が生産された。西側連合軍（イギ
リス軍）に対して始めて対峙したティーガーIIは、第503 重戦車大隊の第
1中隊であった。

†ティーガーの操作班の士気値は9である。このことはカウンターに“ML :
9”と記載されている。

†1944年6月 - 45年(1.4) ソ連では6月、西部戦線では7月から使用可能
となる。BPV=105

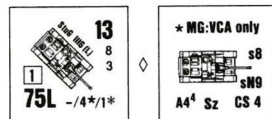


●StuG III G : ソ連軍のT34とKVの
登場によって、ドイツ軍は自軍AFV
の武装を再検討せざるを得なくなっ
た。3号突撃砲は4号戦車F2と同じ
時期にその搭載砲を強化した。ドイツ

軍がますます防御的な立場に追い込まれていくにつれ、突撃砲の生産数は
増大した。砲塔を有する戦車に比べ、安価で短期間に生産することができ、
その低い車高によって待ち伏せ攻撃に有利だったためである。この車両は
突撃砲兵隊と対戦車（駆逐戦車）部隊の両方で使用された。およそ8,600両
が生産されたが、その中にはゲームではG型と同等であるより初期のF型
/F8型が含まれている。また、1,100両が4号戦車の車台を利用して生産
され、4号突撃砲と呼称されたが、ゲーム上は同じものとして扱っている。
1942年末のチュニジアに、6両編成の突撃砲1個中隊が投入された。

†この車両のAAMGはVCA内のみ射撃可能である。このことはカウンター
に“MG : VCA only”と記載されている。

†1942年6 - 12月(1.3), 1943年(1.0), 1944 - 45年(0.9) BPV=61



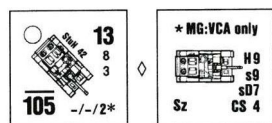
●StuG III G(L) : 3号突撃砲G型の
後期生産型では、CMGの搭載、戦闘
室天板へのリモコン式機銃の設置、そ
して近接防御兵器の搭載といった改
修がなされた。これらの改修がすべて

の車両に同時に行われたわけではないが、ゲームでは全追加武装を搭載し
た車両を後期生産型として表している（カウンターにL ; 後期生産型と記載
されている）。駆逐戦車大隊で使用された場合、突撃砲小隊はStuG III G 4両
で編成された。

†CMGはVCA内のみ射撃可能である。このことはカウンターに“MG :
VCA only”と記載されている。CMGは1944年9月から使用可能となる。

†この車両のAAMGはリモートコントロール方式であり、AFVがBU状態
のときにのみ使用できる。

†1944年7月 - 45年(1.5) BPV=64

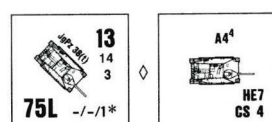


●StuH 42 : 対人攻撃力を増すため
に、3号突撃砲のうち1,211両はleFH
18野榴弾砲を装備して製造された。
突撃砲中隊は1942年から10両編成
となっていたが、そのうちの3両が

StuHによって構成されるようになった。

†この車両のAAMGはVCA内のみ射撃可能である。このことはカウンタ
ーに“MG : VCA only”と記載されている。

†1942年11 - 12月(1.5), 1943 - 45年(1.2) BPV=56

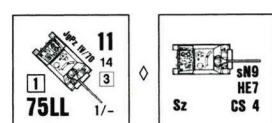


●JgtPz 38(t) : この車両はヘッツァ
ー（Hetzer : トラブルメーカー、もし
くは扇動屋の意）として知られており、
PzKpfw 38(t)のシャーシを利用した
軽対戦車自走砲であった。より初期に

作られた間に合わせの対戦車自走砲（マルダーなど）の代替車両として用
いられた。およそ2,500両が実戦投入されたが、ノルマンディ戦では姿を
見せておらず、投入されたとしてもごく少数だったと思われる。ヘッツァ
ーは通常、歩兵師団所属の独立駆逐戦車大隊に配備された。1944年10月か
ら1945年1月にかけて、100両がハンガリーに供給された。

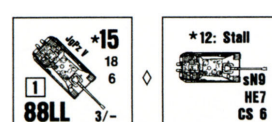
†この車両のAAMGはリモートコントロール方式であり、AFVがBU状態
のときにのみ使用できる。

†1944年8月 - 45年(1.1) BPV=54



●JgtPz IV/70 : パンターと同じ
75mm砲を搭載した4号駆逐戦車で
あり、登場したときにはごく少数が実
戦投入された。その長砲身と分厚い前
面装甲により前方の荷重が過多とな
り、操縦が困難であった。約1,200両が生産された。

†1944年8 - 11月(1.5), 1944年12月 - 45年(1.2) BPV=66

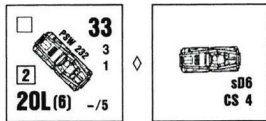


●JgdPz V : その砲、装甲、速力に
よって、ヤクトパンターは第2次世界
大戦で最も優れた駆逐戦車の1つと
言える。最大の難点は、あまりにも数
が少ないことであった ; わずかに390

両のみが生産された。ノルマンディにおいて、ヤクトパンターは第654 重
駆逐戦車大隊第2中隊に配備された12ないし14両が使用されただけであ
った。

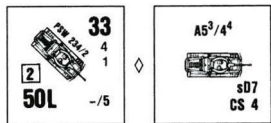
†この車両は、PzKpfw V Gと同様の「失速」の対象となる。PzKpfw V G
の特別ルールを参照。

†1944年6月 - 45年(1.4) BPV=80



●●PSW 232(8rad)：この8 輪装甲車はアクトラッド (Achtrads ; 8 輪の意)として知られており、8 輪駆動、8 輪操舵、完全独立懸架、後進用操縦席を備えた、当時世界最先端の野外走行装輪車であった。8 輪装甲車は軽装甲車の支援用として使用され、その高い不整地走破力から東部戦線で非常に高く評価された。PSW232 は原型となる231 型の無線機増設型であるが、後期には増加装甲が取り付けられており (同時に砲塔防盾が外装式になった)、ゲームのカウンターはこちらの特徴を評価したものになっている。8 輪装甲車231 型と232 型を合わせて607 両が生産された。1942 年には231 型の生産は停止したが、232 型の後期生産型は生産が続行された。1943 年の編成では、PSW221/222 (4 輪装甲車)を装備する装甲車中隊の4 番目の小隊 (重火器小隊)にはPSW231 もしくは232 が6 両配備されていた。より後期には、おそらくこれらの車両はPSW234/1 と同じ運用をされたと思われる。

†1942 年7 月 - 45 年(1.3) BPV=46

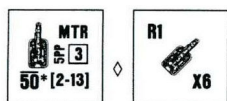


●PSW 234/2：プーマは、PSW233 の後継車種であるPSW234 シリーズのオリジナルデザインである。20mm 機関砲搭載型の234/1 型はプーマより9 カ月遅れて生産が開始された。

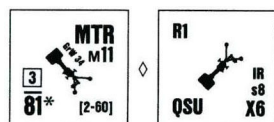
234 型は231 型の美点を保持したまま、よりすぐれた装甲と空冷12 気筒ディーゼルエンジンを搭載していた。101 両が生産され、プーマ25 両でタイプA の装甲偵察中隊が編成された。この中隊は4 個の装甲師団に配属され、西部戦線でも東部戦線でも実戦に参加した。

†1943 年10 月 - 45 年(1.5) BPV=59

ドイツ軍 砲兵器ノート



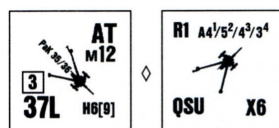
●●5cm leGrW36迫撃砲：標準的なドイツ軍の軽迫撃砲で、1 個歩兵中隊につき3 門が配備されていた。これらはしばしば、中隊内の各小隊に対して個別に配備された。この兵器は小さい割に複雑すぎ、(その他の小口径迫撃砲と同様に) 擲弾筒がややましになった程度の、不十分な射程と破壊力が有していなかった。そのため、1942 年以降、この兵器の大半は2 線級の予備部隊に配備された。ドイツではBuletenschmeisser (肉団子発射機)と呼ばれていた。



●●8cm GrW34迫撃砲：極一般的な中迫撃砲で、正確な口径は81.4mm であった。これは標準的な大隊支援兵器であり、大隊所属の機関銃中隊につき6 門が配備されていた。これらの砲は、しばしば各中隊に2 門ずつ分配された。徒歩の歩兵部隊では、作戦行動中は人力で運搬し、長距離の行軍時には馬車で運搬されていた。GrW34 から発射された砲弾の中で興味深いものに、『跳躍爆弾(バウンシングベティ)』がある。この砲弾は地表に着弾した際に、15 - 50 フィートの高さまで跳ね上がってから爆発するため、弾片による効果が大きかった。堅い地面では効果的であったが、軟弱な地面の場合にはほとんど (あるいは全く) 効果が無かったため、1942 - 43 年にかけてあまり使用されなくなった。戦争後期になると、GrW34 は、より軽量で短射程のkz GrW42というバージョンに置き換えられていった。このモデルは当初は空挺部隊によって使用されていたが、徐々に一般化し、通常の歩兵中隊でもしばしば見られるようになった。

は、しばしば各中隊に2 門ずつ分配された。徒歩の歩兵部隊では、作戦行動中は人力で運搬し、長距離の行軍時には馬車で運搬されていた。GrW34 から発射された砲弾の中で興味深いものに、『跳躍爆弾(バウンシングベティ)』がある。この砲弾は地表に着弾した際に、15 - 50 フィートの高さまで跳ね上がってから爆発するため、弾片による効果が大きかった。堅い地面では効果的であったが、軟弱な地面の場合にはほとんど (あるいは全く) 効果が無かったため、1942 - 43 年にかけてあまり使用されなくなった。戦争後期になると、GrW34 は、より軽量で短射程のkz GrW42というバージョンに置き換えられていった。このモデルは当初は空挺部隊によって使用されていたが、徐々に一般化し、通常の歩兵中隊でもしばしば見られるようになった。

†1939 - 42 年(1.1), 1943 - 45 年(0.9) BPV=30



●●3.7cm PAK 35/36：開戦時における、ドイツ軍の標準的対戦車砲である。1941 年の段階で、15,000 門が生産されていた。最初の実戦は1936 年のスペイン市民戦争であり、そこでは良い評価を得ていた。しかしながら、1940 年のフランス侵攻の際には、PAK35/36 はいくつかのフランス製とイギリス製の戦車の装甲を貫通でき

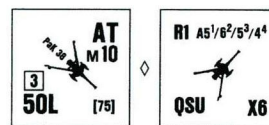
なかった。1941 年には、ソ連侵攻時に T-34 と KV と対峙して、同じように貫通力が不十分であることが立証された。このような能力の低下により、PAK35/36 は“陸軍のドアノッカー”と嘲笑された。1942 年には、ほとんどの対戦車砲大隊が新しい PAK38 を受領している。ほどなくして PAK35/36 のために特殊な HEAT 射出体 (スティラグラネーテ 41) が開発され、これによって 2 線級部隊や予備部隊に退いた後も、この砲の有効性が維持された。1942 年までは、各歩兵連隊の対戦車砲中隊は、この砲を 4 門装備した小隊 3 個によって編成されていた。それとは別に、師団には 3 個中隊から成る対戦車砲大隊があった。

なかった。1941 年には、ソ連侵攻時に T-34 と KV と対峙して、同じように貫通力が不十分であることが立証された。このような能力の低下により、PAK35/36 は“陸軍のドアノッカー”と嘲笑された。1942 年には、ほとんどの対戦車砲大隊が新しい PAK38 を受領している。ほどなくして PAK35/36 のために特殊な HEAT 射出体 (スティラグラネーテ 41) が開発され、これによって 2 線級部隊や予備部隊に退いた後も、この砲の有効性が維持された。1942 年までは、各歩兵連隊の対戦車砲中隊は、この砲を 4 門装備した小隊 3 個によって編成されていた。それとは別に、師団には 3 個中隊から成る対戦車砲大隊があった。

この砲はスティラグラネーテ 41 として知られる特殊な HEAT 弾を発射できた。この砲弾は後ろに棒の付いた卵形の成型炸薬弾頭であり、後部の棒は、フィンの付いた穴あきのスリーブに装着されていた。この砲弾は砲口装填式であった。すなわち、砲身先端の砲口に後部の棒を差し込むのである(この際、外側のスリーブ部分は砲身の外に出た状態となった)。発射は弾頭のない特殊な薬莖を砲尾に装填し、これによって砲弾を射出する方式であった。フィンによって弾道を安定させるこの砲弾の初速は 110m/秒であり、その最大射程はおよそ 364m であった。

†H#[9]の基本命中ナンバーは 11 である。射程距離 1 ヘクスにつき命中ナンバーは 1 低下する。最大射程は 9 ヘクスである。全ての射撃側/目標側の TH DRM は通常と同じく適用される。通常は車両目標にのみ効果があるが、HEAT 弾ゆえ、他の目標にも限定的な効果がある(C8.31)。[SK としての補足：この砲弾の火力は 12FP に相当し、他の HEAT 弾と同様の目標制限がある。また、この砲弾は残留火力を残さない。]この砲弾が発射された場合、その砲の ROF は 1 低下する(すなわち、色付き dr1-3 ではなく、1-2 のみ、ROF が維持される)。

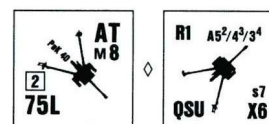
†1936-45 年(1.0) BPV=30



●●5cm PAK38対戦車砲：ドイツ軍はPAK35/36 よりも強力な対戦車砲の必要性を予見しており、その結果としてPAK38 が誕生した。しかしながら、この新型砲が登場したときに、多くの戦車の装甲が厚くなっていることは予見できなかった。マチルダ、T-34、それにKV といった相手に対しては、希少なAPCR 弾を使用したときのみ満足な結果を与えることができた。とはいえ、他の点に関しては洗練された砲であった。小型で、人力操作が容易であり、革新的な設計がいくつか導入されていた。この砲は当初対戦車大隊に配備されていたが、より強力な7.5 - 7.62cm クラスの対戦車砲が登場するとPAK38はその座を譲り渡し、PAK35/36 に代わって連隊所属の対戦車中隊に配備された。1942 年にAPCR 弾の生産が休止した際、PAK38 の有効性を継続させるために、この砲の弾薬は一時的に休止命令を免除されていた。1943年には、牽引式対戦車砲小隊の定数は4 門から3 門に減らされていた。

多くの戦車の装甲が厚くなっていることは予見できなかった。マチルダ、T-34、それにKV といった相手に対しては、希少なAPCR 弾を使用したときのみ満足な結果を与えることができた。とはいえ、他の点に関しては洗練された砲であった。小型で、人力操作が容易であり、革新的な設計がいくつか導入されていた。この砲は当初対戦車大隊に配備されていたが、より強力な7.5 - 7.62cm クラスの対戦車砲が登場するとPAK38はその座を譲り渡し、PAK35/36 に代わって連隊所属の対戦車中隊に配備された。1942 年にAPCR 弾の生産が休止した際、PAK38 の有効性を継続させるために、この砲の弾薬は一時的に休止命令を免除されていた。1943年には、牽引式対戦車砲小隊の定数は4 門から3 門に減らされていた。

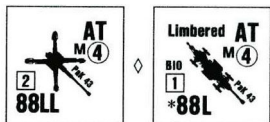
†1941 年1 - 6 月(1.3), 1941 年7 - 12 月(1.2), 1942 年1 - 6 月(1.1), 1942 年7 月 - 45 年(1.0) BPV=37



●●7.5cm PAK40対戦車砲：5 cmPAK38 の次の世代をになう対戦車砲として計画された。実際、PAK40 はPAK38 の拡大版であり、(無論より大きく見えることを除いて) 非常に良く似た外観をしていた。PAK40 の設計は1939 年から始まっていたが、バルバロッサ作戦が始まってT-34 やKV と遭遇する事態になった時点では、まだ生産は開始されていなかった。ひとたび生産が開始されると、それは1945 年まで継続された。実戦では、PAK40 は極めて優れた対戦車砲であった。唯一の欠点はその重量で、そのために人力移動が困難だった。PAK40 は対戦車大隊の標準装備になっていった。多くの駆逐戦車に搭載され、IV 号戦車やIII 号突撃砲の長砲身7.5cm 砲の元となった。しばしば野砲として使用される場合もあったが、その場合には限られた仰角が欠点となった。

良く似た外観をしていた。PAK40 の設計は1939 年から始まっていたが、バルバロッサ作戦が始まってT-34 やKV と遭遇する事態になった時点では、まだ生産は開始されていなかった。ひとたび生産が開始されると、それは1945 年まで継続された。実戦では、PAK40 は極めて優れた対戦車砲であった。唯一の欠点はその重量で、そのために人力移動が困難だった。PAK40 は対戦車大隊の標準装備になっていった。多くの駆逐戦車に搭載され、IV 号戦車やIII 号突撃砲の長砲身7.5cm 砲の元となった。しばしば野砲として使用される場合もあったが、その場合には限られた仰角が欠点となった。

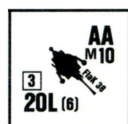
†1942 年1 - 3 月(1.5), 1942 年4 - 7 月(1.4), 1942 年8 - 11 月(1.3), 1942 年12 月 - 43 年3 月(1.2), 1943 年4 月 - 45 年(1.1) BPV=43



●**8.8cm PAK43対戦車砲**： クルップ社によって設計されたこの砲は、WW2 で実戦に参加した対戦車砲の中で最高のものであり、おそらく、かつて設計されたすべての対戦車砲の中で最も優れたものであろう。

この砲は容易に隠蔽でき(地上高が1.73m しかなかった)、きわめて強力な打撃力を持ち、着荷状態でも射撃可能で、360°の旋回能力を持ち、正確な長距離射程を有していた。この素晴らしい砲の車載型は、ティーガーIIをはじめ、ナスホルン、ヤクトパンター、そしてフェルディナントに搭載された。ゲームのカウンターは、Flak41 対空/対戦車砲も表している。Flak41 は1943 年のチュニジア (RF : 1.5) に初めて投入された。ただし、Flak41 として扱うときには、着荷状態であるか否かにかかわらず、B10 として扱う。連続射撃をすると、すぐに機関部が過熱する傾向があったのである。

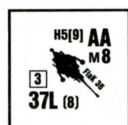
†1944 - 45 年(1.3) BPV=67



●**2cm FLAK38 対空砲**： FLAK30 はその欠点を是正するためにモーゼル社で再設計され、その結果誕生した FLAK38 は対戦を通じてのドイツ軍の標準的な軽対空砲となった (もっとも、すべての旧タイプモデルがこの砲に切り替えられたわけではなかった)。また、この砲は

幾つかの偵察車両にも装備された。1944 年の初めには、連合軍の地上攻撃機が高速・重装甲化したために、単砲身の 2cmFLAK では対空砲としての有効性が次第に減じられていった。1944 年 3 月の時点で、ドイツ空軍では 19, 692 門の FLAK30/38 が使用されていた。同時期の陸軍での装備数は不明である。

†1939 - 45 年(1.0) BPV=32

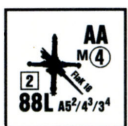


●**3.7cm FLAK36/37 対空砲**： ドイツ軍のもう 1 つの標準的な軽対空砲。この砲の被牽引タイプは、陸軍の師団編成表にはほとんど見受けられない。明らかにこの砲の大半は対空師団、および独立対空大隊で使用されていたのである。3.7cmFLAK 小隊はこの砲 3 門からなり、3

個小隊で 1 個中隊を編成していた。FLAK36 と 37 の主な相違点は、使用している照準器の違いであった。

†この砲は PAK35/36 と同様に、スティラグラネーテ 41 を発射できる。このことはカウンターに H5[9] と記載されている。PAK35/36 の特別ルールを参照。

†1939 - 45 年(1.3) BPV=36

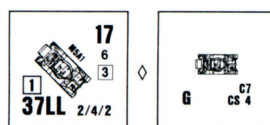


●**8.8cm FLAK18/36 対空砲**：“88” (アハト・アハト) は、恐らく第 2 次世界大戦で最も有名な砲であろう。この砲はクルップ社の技術者チームによって、スウェーデンで秘密裏に設計された。その設計は極めて優れており、直ちに空軍の重対空部隊の主力となった。FLAK18 と

36 の相違はわずかなもので、多くの部品が交換可能であった。スペイン市民戦争において、地上目標への使用が効果的であることが判明し、そのための砲弾が開発された。88mm 砲の名声 (悪名) を高めたのは北アフリカ戦線での働きによるものだった。かの地では、かつて不死身と恐れられた英軍のマチルダ戦車を、2000m の距離からたやすく撃破できたのである。砂漠での英軍戦車兵はこの砲を非常に恐れており、そのため“88”が初弾を外しても彼らはしばしば自身の戦車を放棄した。なぜなら、2 発目はほとんど外さない事を知っていたからである。その名声は終始決して衰えなかった。その理由のひとつは、“88”は戦争終結時においても、“ジャンボ”を除く米英のいかなる戦車の前面装甲でも打ち砕くことができたからである。もうひとつの理由は、“88”が大量に製造されたためである ; 例えば、ドイツ空軍は 1944 年 8 月の時点で 10, 704 門を配備しており、これには陸軍の対空大隊での配備数は含まれていないのである。これらの事実は、この砲がそれに対峙したものに強烈な印象を植え付けるものであったことを容易に理解させてくれる。88mm 砲小隊はこの砲 4 門から編成されており、通常 SdKfz7 で牽引されていた。

†1939 - 45 年(1.2) BPV=55

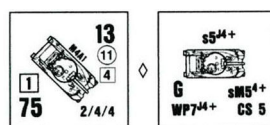
アメリカ軍 車両ノート



●**M5A1** : M5 は M3A1 と置き換えられたわけではなく、両者は並行して生産されていた。それどころか、M5 は M3A1 よりも数カ月早く生産に入っていたのである(M5 と M5A1 はゲーム上

同一の性能を持つため、M5 のカウンターは用意されていない)。車体前面装甲には防御効果を増すべく傾斜が付けられ、砲塔前面の装甲は増強された。この新たな装甲形態は M3A1 にも取り入れられ、その結果生まれたのが M3A3 である。しかしこの車両は、レンドリースにのみ用いられた(自由フランス軍、チトー・パルチザン、中国国民党軍)。設計者たちは、M3A3 に取り掛かっている間に砲塔の砲架を改良し、無線機を車体から砲塔後部に動かすことにした。この新しい砲塔は M5 のものよりも優れていると判断され、M5 の生産ラインにも導入された。これが M5A1 である。M5 と M5A1 は、どちらもチュニジアにおける第 1 機甲師団の軽戦車大隊の損害を補充するのに用いられた。1943 年 7 月のシシリー上陸作戦時、すべての M3 と M3A1 は ETO から撤退し、M5A1 が陸軍の標準的な軽戦車となった。PTO においては、1944 年 2 月にロイ・ナムール(マーシャル諸島)島で第 4 海兵戦車大隊が用いるまで、アメリカは M5A1 を投入しなかった。2,074 両の M5 と、6,810 両の M5A1 が生産され、M3 からの一連の軽戦車の生産台数を総計すると、19,316 両に達した。陸軍と海兵隊のどちらも、5 両で小隊を編成した。イギリス軍は、M3 から M5A1 までの一連の軽戦車を“スチュアート”と総称した。

†北アフリカ : 1942 年 11 月 - 43 年 5 月(1.3) ETO : 1943 年 6 月 - 45 年 5 月(1.1) PTO : 1944 年 2 月 - 5 月(1.3), 44 年 6 月 - 7 月(1.2), 44 年 8 月 - 45 年(1.1) BPV=46

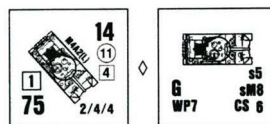


●**M4A1** : シャーマンの最初の量産型であり、また、設計段階から鋳造の車体上部構造を持つ唯一の形式でもあった。6 種類の異なる弾薬(AP : M61 or M72 HE : M48 or Mk.I 煙幕弾 : M89

WP 弾 : Mk.II) を搭載可能であった。6,281 両が生産された。M4A1 は米軍が北アフリカで使用した唯一のシャーマンである。ゲームのカウンターには、クライスラー社のデトロイト戦車製造所で作られた 1,676 両の M4 中戦車も含まれている。これらの車両は“ハイブリッド型”として知られており、M4 に M4A1 と同様の車体鋳造構造物を取り付けたものであった。大戦中の陸軍の規定では、1 個中戦車小隊は 5 両の戦車で編成されていた。

†WP7 と s5 は 1944 年 6 月から使用可能である。これはカウンター上で“J4+”と記載されている。

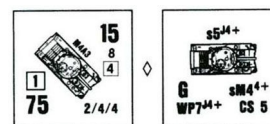
†北アフリカ及び ETO : 1942 年 12 月(1.4), 1943 年 1 月(1.3), 1943 年 2-5 月(1.2), 1943 年 6 月 - 1945 年(0.9) PTO : 1943 年 12 月 - 45 年(0.9) BPV=70



●**M4A2(L)** : 1944 年の新設計による車体前面構造の変更が施された、M4A2 の最終生産型である。この変更は M4 と M4A1 を除くすべてのシャーマンに施された。それまでの複

数の装甲板を複雑に組み合わせた車体前面から、すっきりとした 1 枚の装甲板による構造に変更されたのである。これらのシャーマンの前面装甲は、47°の傾斜角を付けて取り付けられていた。およそ 1,600 両の M4A2(L) が生産された。“(L)”とは後期生産型の意味である。

†1944 年 7 月 - 1945 年 6 月(1.3) BPV=72

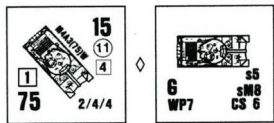


●**M4A3** : M4A3 が他の初期生産型のシャーマンと異なっていたのは、フォード V8 エンジンを搭載していた点であった。このエンジンは高出力、コンパクト、かつ整備が簡便であることから、M4A3 は陸軍から主力生産型に指定された。しかしながら初期

生産型は陸軍が要求した数を供給できず、数量的に少数型にとどまった。

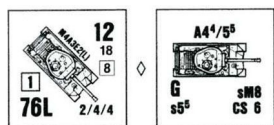
†WP7 と s5 は1944 年6 月から使用可能である。これはカウンター上で“J4+”と記載されている。

†1943 年7 月 - 1945 年(1.3) PTO : 1944-45 年(1.3) BPV=70



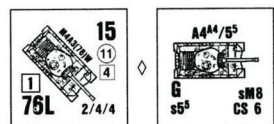
を車体側面から砲塔床面に移し、さらにそこをグリセリンによって不凍結処理を施した水で覆ったことである。これにより、砲弾ケースが被射撃による断片などで破損した場合でも、不凍液が火災を消火したり、少なくとも炎上を防ぐことができると考えられた。これは“湿式弾庫”として知られており、装甲が貫通した場合にあまりにも容易に炎上しやすい傾向を持っていたシャーマンを救うこととなった。M4A3(75)W は、他の75mm 砲搭載型のシャーマンが生産を中止した後も、1945 年の3 月まで生産され続けた。最終的には3,071 両が生産された。

†1944 年6 月 - 45 年(1.1) PTO : 1944 年10 月-45 年(1.1) BPV=73



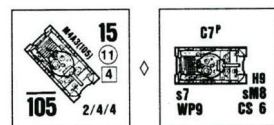
部のディファレンシャルノーズは5.5 インチの厚みのある鋳造製となった。新たな砲塔は6 インチの厚さの鋳造製で、防盾の厚さは7 インチに達した。基本設計はすべて75mm 砲搭載型(M4A3E2)であったが、1945年の始めから76mm 砲への換装(M4A3E2(L))が認められた。この主砲の換装は大変簡単であったため、1944 年には早くも“非認可の”76mm 砲搭載型が登場することが可能であった。M4A3E2 は“ジャンボ”と呼ばれ、大変成功した派生型となった。敵の支配下地域を移動する際には、しばしば縦隊の先導役を務め、パストーニュ救出の際に重要な役割を果たしたのものの当然のことであった。75mm, 76mm 砲のどちらの形式もイタリア戦線とPTO で用いられていないことは明白である。

†1944 年10 月 - 45 年3 月(1.6), 1945 年4 - 5 月(1.5) BPV=82



加えて、その半数以上には新しいHVSS(Horizontal Volute Spring Suspension: 水平スプリング型サスペンション)が用いられていた。このサスペンションはそれまでのVVSS(Vertical Volute Spring Suspension: 垂直スプリング型サスペンション)よりも乗り心地が良く、接地圧も低減することができた(ゲームシステム上の『低接地圧』を獲得するほどの低減ではない)。HVSS を装備した車両にはM4A3E8 の形式番号が与えられ、“イージー・エイト”と呼ばれた。戦後の自衛隊にも供給されている。

†1944 年7 - 10 月(1.1), 1944 年11 月 - 45 年2 月(1.0), 1945年3 - 5 月(0.9) BPV=77



を装備していた。M4A3(105)はさらに多くの3,039 両が生産され、その大半がHVSS を装備しており、VVSS を装備したのは500 両余りであった。榴弾砲搭載型のシャーマンは、動力式砲塔旋回装置、ジャイロスタビライザー、そして湿式弾庫を用いていなかった(しかしながら、砲弾は装甲を施したケースに収められていた)。陸軍中戦車大隊のHQ 中隊にはこの車

●M4A3(75)W : 1944 年2 月の始めから、M4A3 の生産は47°の傾斜をつけた前面車体装甲を持ち、主砲の砲弾の搭載方法を工夫した改良型に移行した。その工夫とは、砲弾の搭載場所

●M4A3E2(L) : M4A3E2 は重装甲の突撃戦車として開発され、1944 年5 月から7 月の間に254 両が生産された。車体前面と側面には1.5 インチの追加装甲が施され、新設計の車体下部

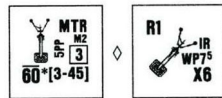
●M4A3(76)W : この車両はM4A3(75)Wの車体に新設計の76mm砲搭載型砲塔を乗せたものである。この形式は他の76mm砲搭載型のシャーマンよりも多い、4,542 両が生産された。

●M4A3(105) : シャーマンの75 mm砲搭載型砲塔は、当初より105mm榴弾砲を搭載可能なように設計されていた。M4(105)は1,641 両が生産され、そのうちおよそ半数がHVSS

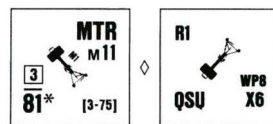
両3 両から構成される突撃砲中隊が配備されていた。また、大隊の各中戦車中隊におけるHQ 中隊に1 両(1945 年には2 両)ずつ配備されていた。

†1944 年(1.3), 1945 年(1.2) PTO : 1944 年10月 - 1945 年(1.3) BPV=73

アメリカ軍 砲兵器ノート

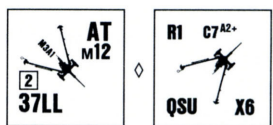


●M2 60mm迫撃砲 : この軽迫撃砲は、フランス製プラント60mm 迫撃砲をライセンス生産した物であり、1940 年にアメリカ陸軍に採用された。およそ75,000 門が生産されている。陸軍のライフル中隊は、自身に所属する重火器小隊内にこの迫撃砲を3 門有していた。機械化騎兵偵察隊は9 門(1 個小隊につき3 門: アメリカ軍車両ノート54 を参照)、各機甲歩兵小隊は1 門のM2 迫撃砲を装備していた(アメリカ軍車両ノート28 と29 を参照)。各空挺歩兵小隊にも1 門のM2 迫撃砲があり、1944 年の8 月まではグライダー歩兵小隊でも同様であった。各グライダー歩兵中隊は、自身に所属する重火器小隊に2~4門以上(時期により異なる)のM2 迫撃砲を装備していた。海兵隊のライフル中隊が有していたのは2 門である(正式には1943 年の4 月をもって3門に増加されている。しかしながら、多くのライフル中隊はより遅い時期になるまで3 門目の迫撃砲を受け取ることができなかった)。1944 年の5月には、各海兵歩兵大隊のHQ 中隊に4 門のM2 迫撃砲が配備されている。海兵襲撃中隊はそれぞれ3 門の60mm 迫撃砲を有していた。



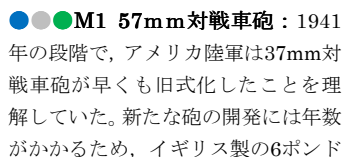
●M1 81mm迫撃砲 : この兵器は古典的なフランス製プラント81mm 迫撃砲のコピーであり、アメリカ軍の標準的な中隊迫撃砲であった。この迫撃砲は軽量弾(7ポンド: 約3kg)、重量弾(10.75 ポンド: 約5kg)およびWP 弾を射撃できた。大戦中に約30,000 門生産された。歩兵大隊所属の重火器中隊で主に使用され、そこでは各々2 門の迫撃砲からなる3 つの射撃チームから成る1 個迫撃砲中隊を編成していた。空挺部隊の迫撃砲中隊は2 つの射撃チームしか有していなかった。また、空挺部隊の81mm 迫撃砲中隊は重火器中隊の一部ではなく、大隊のHQ 中隊に属していた。機械化騎兵偵察部隊や、駆逐戦車(自走砲)大隊は、それぞれ3 門の81mm迫撃砲を有していた。1944 年までは、海兵隊の大隊所属の重火器中隊は4 門の81mm 迫撃砲を装備していた(それ以降、この小隊は大隊HQ中隊に属することになった)。海兵襲撃部隊のHQ 中隊は、この砲を8 門装備していた。

†1940 - 45 年(1.1) BPV=29



●M3A1 37mm対戦車砲 : アメリカ製の最初の対戦車砲として、1937年にドイツ軍のPaK35/36をベースに開発が始まった。多くの対戦車砲と異なり、M3A1の閉鎖器は手動式であり、そのために発射頻度が低かった。北アフリカで実戦に投入されたが、その後ETOでは57mm砲へと置き換えられていった。しかしながら、PTOにおいては終戦まで使用が続けられた。日本軍の軽装甲AFVには十分な威力であったことと、散弾(SKではルール化されていない)が使用できることにより歩兵突撃を阻止する力があつたためである。18,702門が生産された。通常はジープか、3/4tトラックで牽引された。1941-43年の終わりまでに、この砲は以下の編成で使用された。陸軍歩兵大隊のHQ中隊、歩兵連隊の対戦車砲中隊、機甲歩兵中隊(機甲歩兵小隊につき1門と、HQ中隊にも1門配備されており、M2ハーフトラックで牽引された)、機甲歩兵連隊のHQ中隊、機甲師団および機甲偵察大隊のHQ中隊、そしてグライダー歩兵連隊である。この砲の1個小隊は、4門の砲で編成されていた。加えて、イタリアにおける第10山岳師団には、各歩兵大隊につき3門の37mm対戦車砲が配備されていた。海兵隊の師団では、各歩兵連隊の重火器中隊に3ないし4門の37mm対戦車砲があつた。これに加え(1943年4月から44年末まで)、特殊火器大隊には6門の砲から成る対戦車砲中隊が3つ配備されていた。海兵襲撃連隊は、この砲を4門装備していた。フィリピン陸軍も、1941-42年までの間、この37mm対戦車砲を使用した。

†北アフリカおよびETO : 1942年11月 - 43年6月(0.9), 43年7 - 12月(1.2), 44 - 45年(1.4) PTO : 全期間(1.0) BPV=30



トHE 弾(弾薬欠乏ナンバ－“7”)とAPDS 弾(弾薬欠乏ナンバ－“4”)は、ETOでは1944 年6 月から使用可能となる。HE7は、PTOでは1945 年以降使用可能となる。この制限は、カウンター上では6 月(June)をあらわすJ と、ETO をあらわすE で示されている。ETO での使用期間は43 年7 月から45 年5 月までであり、PTO での使用期間は44 年から45 年の終わりまでである。

●**M5 3インチ対戦車砲**：1941年にM157mm 対戦車砲の開発が開始されたのと並行して、陸軍はより強力な兵器の開発計画も進行し始めた。できる限り早く量産に入れるように意図

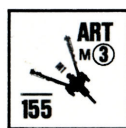
†イタリアではAPCR 使用不可。

†ETO (イタリア以外) : 1944 年6 月 - 8 月(1.3), 1944年9 月 - 45 年2 月
(1.2), 1945 年3 月 - 5 月(1.4) イタリア : 1944 年11 月 - 1945 年5 月
(1.4) BPV=40



を含めた 40 カ国以上で使用されつづけている。現在、アメリカでの呼称は M101A1 となっている。

† ETO: 1942 年 12 月 - 45 年 5 月(1.0) PTO: 1942 年 8 - 10 月(1.2), 1942 年 11 月 - 45 年(1.0) BPV=34

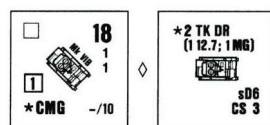


●M1 155mm 榴弾砲: M1の製造はゆっくりとしたものであり、1942年の終わりにはたったの33門が完成しただけであった。しかしながら、その後信頼性と命中精度が評価され、戦争中には4,035門が製造された。戦後においても僅かな改良が加えられただけで、アメリカを

含めた 30 カ国以上で使用されつづけている。現在、アメリカでの呼称は M114A1 となっている。155mm 榴弾砲は、105mm 榴弾砲の相棒として師団所属の砲兵隊で最も一般的であった。そこでは 1 個歩兵師団につき、3 個中隊（各中隊は 155mm 榴弾砲 4 門を配備）からなる中野砲大隊が 1 つ配属されていたのである。また、“ワンファイブファイブ”は、師団に属さない独立中野砲大隊にも配備されていた。海兵隊の師団は、1945 年の 5 月から正式に 155mm 榴弾砲大隊を配備することとなった。

↑ PTO 以外：194 年 7 - 8 月(1.5), 43 年 9 - 10 月(1.4), 1943 年 11 月 - 45 年 5 月(1.2) PTO：1944 - 45 年(1.3) 海兵隊：1945 年 2 - 6 月(1.5)
BPV=40

イギリス軍の編成上の部隊名称は、アメリカ軍のものと異なっています。「レジメント」はアメリカ軍では複数の大隊からなる「連隊」を表しますが、イギリス軍ではアメリカ軍の大隊規模の部隊に相当します。レジメントは複数の「スコードロン（アメリカ軍の中隊に相当）」から成り、スコードロンは複数の「トループ（アメリカ軍の小隊に相当）」から成り立っています。

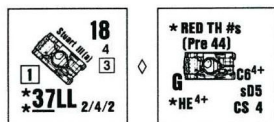


● **MkVIB軽戦車**: MkVI シリーズは、1939-40 年の英軍機甲戦力の大半を構成していた。これらの車両は植民地での任務や偵察向けの車両とみなされていたが、しばしば実戦において戦

車部隊として用いられた。その場合、甚大な損害を被ることが容易に予想された。MkVIB は832 両生産され、MkVI シリーズで最も数が多かった。武装は2 丁のピッカース水冷機関銃であり、1 つは50 口径、もう1 つは303 口径であった。MkVI シリーズは全部で1,180 両が生産された。MkVI シリーズの前にもいくつかの軽戦車が生産されたが、実戦投入されることはほとんどなかった。MkVI は軽戦車もしくは機甲レジメントの軽戦車スコードロンを構成する3 個トループで用いられた。また、BEF (British Expeditionary Force : イギリス大陸派遣軍) における師団つきの騎兵レジメントでも使用された。軽戦車スコードロン、もしくは陸軍戦車大隊のHQ には4 両のMkVI が配備されていた。また、各陸軍戦車中隊のHQ には1 両のMkVI が含まれていた。MkVIC 以外のMkVI モデルは、ベルギー、フランス、北アフリカで戦い、その他にはギリシャ (1941 年4 月、第4 軽騎兵大隊)、クレタ島 (1941 年5 月、第3 軽騎兵大隊の1 個スコードロン)、シリア (1941 年6 - 7 月、オーストラリア第6、第9騎兵レジメント)、シンガポール (1942 年2 月、第18 歩兵師団)、ジャワ (1942 年3 月、第3 軽騎兵大隊のC スコードロン) でも戦った。

†AP TK 表を用いる場合には、TK DR を2 回行う。ひとつは12.7mm (50口径)で、もうひとつはMG で判定し、射撃側が選択してどちらかひとつの結果のみを適用する。このことはカウンターの裏面に“2TK DR (1 12.7 ; 1 MG)”と記載されている。

†ETO : 1940年5 - 6月(ベルギー・フランス ; 1.0), 1941年4月(1.1), 1941年5月(1.4) 北アフリカ : 1940年6月 - 1941年3月(1.0), 1941年4月(1.1), 1941年5 - 6月(1.2), 1941年7 - 8月(1.3), 1941年9 - 10 月(1.4), 1941年11 - 12月(1.5) シリア : 1941年6 - 7月(1.4)
PTO : 1942年2月(1.5), 42年3月(1.2) BPV=35

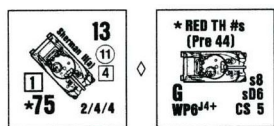


●**スチュアートⅢ(a)**：これはアメリカ製**M3A1 軽戦車**に対して与えられた名称である。中東における戦車補充の供給源を欲していたイギリス軍は、M3 が自国の巡航戦車とほぼ同等の

能力を有することを認知し、1941 年の初頭にレンドリースによる供給をアメリカに要求した。M3—M5A1 までの軽戦車に対して、イギリス軍は公式に“スチュアート”の名称を与えたが、その驚異的な信頼性と扱いやすさから一般には“ハニー”と呼ばれていた。イギリス軍はM3 に対して若干の仕様変更を施した。固定BMG (M3 のBMG は固定式であった) を取り除いて積載量を増やしたり、乗員の配置を変更したり、あるいはいくつかの車両に煙幕展開器を取り付けたりした。スチュアートはクルセイダー作戦に参加したことにより、WW2 で初めて実戦に参加したアメリカ製戦車となった。この戦いでは第7 機甲師団の第4 旅団の戦車の全てがスチュアートで構成されており、巡航戦車として用いられた。その後の北アフリカでは、スチュアートの数は減少する。スチュアートをいかに改良しても、ドイツ戦車の装甲と砲の口径の増大に対抗することが敵わなくなったためである。1942 年の初め、グラント戦車を配備された幾つかの連隊にはスチュアート1 個中隊が配備されていたが、その役目はすでに警戒と索敵任務用となっていた。その他のスチュアートは、護衛/HQ 用の車両として、さまざまな部隊に配備された。第2 次エル・アラメインの戦い(1942 年10 月)以降、北アフリカでスチュアートを使用していたのは第7 機甲師団の第4 軽機甲旅団および第22 機甲旅団、第2 ニュージランドおよび第9 オーストラリア師団の騎兵大隊のみであった。PTO では日本軍戦車と遭遇することはまれであった。スチュアートは日本軍戦車よりもあらゆる点で優位性を維持したため、戦闘時に本来よりも大きな役割を果たすことになった。PTO で最初にスチュアートを使用したのは、ビルマにおいて、第7 機甲旅団の第7 軽騎兵大隊と王立戦車連隊第2 大隊によってであった。次いで、オーストラリア第2/6 機甲レジメントの一部によってパプアで使用され、さらに後にはインド第7 軽騎兵レジメントとインド第45 騎兵連隊によってビルマで使用された。スチュアートの1 個トループは3 両で構成されていたが、HQ スコードロンと1942 年のグラントとの混成部隊においては4 両で構成されていた。1944-45 年における機甲レジメントもしくは戦車大隊における偵察トループは特殊であり、11 ないしは12 両ものスチュアートで構成されていた。

†1944 年よりも前(すなわち1943 年以前)ではMA のTH#は赤色を使用する。このことはカウンターに“Red TH#s(Pre44)”と記載されている。

†北アフリカ：1942年10月 - 1943年5月(1.4) ETO : 1944年1 - 4月(1.4), 1944年5月 - 1945年(1.3) PTO : 1944 年3月 - 1945年(1.2 : インドビルマでのみ使用) BPV=46

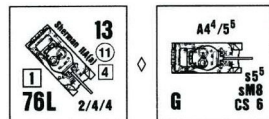


●**シャーマンⅡ(a)**：1942 年6 月21 日にトブルク陥落の知らせを受けたチャーチルは、ただちにルーズベルトに対して新型のシャーマン戦車をできる限り多数供給してくれるよう依頼した。それを受けて、当初はパットン将軍の第2 機甲師団をエジプトに派遣することになった。しかし、移送上の問題が生じたために、この命令は破棄されることになった。師団はその年の遅くにならなければ到着不可能であり、それはあまりに遅すぎた。そのため、アメリカ軍部隊からシャーマンだけが抽出され、エジプトに送られた。第2 次エル・アラメインの戦いの際には第8 軍は285 両のシャーマンを保有しており、うち250 両がただちに行動可能であった。それらの3 分の2 がシャーマンII, すなわちM4A1 中戦車であった。イギリスにレンドリースで送られたシャーマンII は942 両のみであり、戦場における名声はすぐに他のタイプのシャーマンにとってかわられた。

†1944 年よりも前(すなわち1943 年以前)ではMA のTH#は赤色を使用する。このことはカウンターに“Red TH#s(Pre44)”と記載されている。

†WP6 は1944 年6 月から使用可能である。これはカウンター上で“J4+”と記載されている。

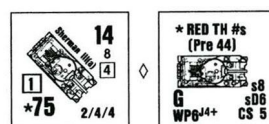
†1942年10月 - 1943 年5月(1.0), 1943年9 - 12月(1.1), 1944年1 - 7月(1.2), 1944年8月 - 1945 年5月(1.3) BPV=68



●**シャーマンⅡA(a)**：これはアメリカ製M4A1(76)W のことである。モン

トゴメリーが彼の第21 軍集団の追加補充が複雑化するのを避けたいと望んだために、イギリスが受け取ったこの戦車のほとんどはイタリア戦線に送られることになった。しかし最終的には、ポーランド第1 機甲師団の第2 機甲連隊によって、ヨーロッパの北西部でも使用された。イタリアでは、当初可能な限り戦車トループにつき1 両のシャーマンIIA を配備していたが、後にはこの戦車だけでトループが構成されるようになった。1,330 両のシャーマンIIA がレンドリースに供与され、そのすべてがイギリスに送られた。イギリスの名称における“A”は76mm 砲装備型を示す。

†イタリア：1944年9 - 11月(1.3), 1944年12月 - 1945年2月(1.2)
その他のETO : 1944年11月 - 1945 年5月(1.5) BPV=75



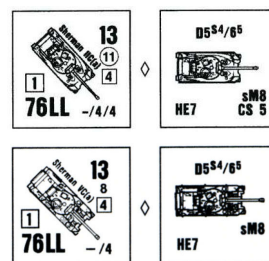
●**シャーマンⅢ(a)**：これはアメリカ製 M4A2 中戦車のことである。イギリス軍は、大量に供与された 75mm 砲搭載のシャーマンの中で、その速力、操作性、信頼性から言って、このシャ

ーマン III が最良のものと考え、これを好んだ。第2 次アラメインの戦いの際には、第8 軍の装備したシャーマンのおよそ3 分の1 がこのタイプであった。イギリス軍には 5,041 両がレンドリースで送られ、自由フランス軍には 382 両が与えられた。

†1944 年よりも前(すなわち1943 年以前)ではMA のTH#は赤色を使用する。このことはカウンターに“Red TH#s(Pre44)”と記載されている。

†WP6 は1944 年6 月から使用可能である。これはカウンター上で“J4+”と記載されている。

†1942年10月(1.4), 1942年11月 - 43年2月(1.3), 1943年3月(1.2), 1943年4月 - 6月(1.1), 1944年7月 - 1945 年5月(1.0) BPV=68



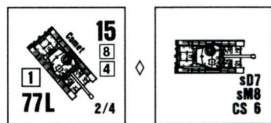
●**シャーマンⅡC/VC(a)**：チャレンジャーがノルマンディ上陸に間に合わないことが明らかになった時点で、強力な17ポンド砲を搭載する代替戦車としてシャーマンが候補に挙がった。この案の実現は疑問視されたが、部品の一部を改良すれば実際に稼働することが試験的な導入によって確認された。ただちに急激な換装計画

が実行され、1944 年の6 月には十分な17 ポンド型シャーマン(ファイアフライと呼ばれた)を生産することができた。その数は平均してDD タイプ以外のシャーマン1 個トループにつき1 両、第7 機甲師団の第22 機甲旅団のクロムウェル1 個トループにつき1 両の割合で配備できるものであった。ファイアフライは、大半のドイツ軍戦車の砲と同等以上の威力を持つ砲を備えた、初めてのイギリス戦車となった。それはすなわち、あらゆるアメリカ製戦車の砲をしのぐ威力を持っているということでもあった。この戦車はしばしば“見晴らしのよい”位置で使用された。すなわち、背面の憂いのない後方に陣取り、パンターやティーゲルといったドイツ戦車から75mm 型シャーマンの前方を守ったのである。ドイツ軍戦車はファイアフライを恐れ、これと遭遇した際には優先目標として攻撃した。ファイアフライにはBMG もその操作員もなく、その場所には主砲の砲弾が搭載されていた。ファイアフライの最も一般的なバージョンは、シャーマンV (M4A4 のこと。2 機のエンジンを搭載していたため、車体がほかのシャーマンよりも長かった) を基にしたVC 型であった。次に多いタイプがII (M4A1) とハイブリッドI (M4A1 の車体上部構造を持ったM4) を基にしたタイプで、ゲーム上は両方ともIIC 型とみなしている。イギリスの名称における“C”は17 ポンド砲装備型を示す。ちなみに、“B”は105mm 砲装備型のことであるが、SK のイギリス軍には含まれていない。全部で約600 両のファイアフライが生産された。

†APCR は1944 年9 月から使用可能である。これはカウンター上で“D5⁸⁴”と記載されている。

†IIC イタリア以外のETO : 1944 年6 - 12月(1.4), 1945 年1月 - 5月(1.1)
イタリア : 1944 年10月 - 1945 年3月(1.6), 1945 年4月 - 5月(1.4)
BPV=77

†VC イタリア以外のETO : 1944 年6 - 12月(1.1), 1945 年1月 - 5月(1.2)
イタリア : 1944 年10月 - 1945 年5月(1.5) BPV=76

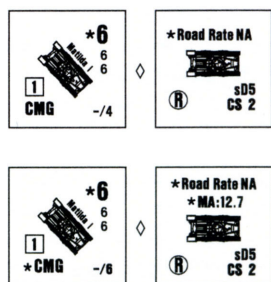


●(A34)コメット: これは最後の巡航戦車である。もともとはクロムウエルの改良版を目指していたが、最終的にはほとんど(60%ほど)が再設計された。コメットの主砲は公式には 77mm

砲と呼ばれていたが、実際には 17 ポンド砲(76.2mm)の砲身長を短くし、弾薬の薬莖部分を短縮することで威力を低下させたものであった。この一見改悪に見える変更は、チャレンジャーのように、砲が車体に対して大きな負荷となることを防ぐ意図があった。1944 年中には、クロムウエルの部隊をコメットに改編する計画であったが、開発と試験に時間がかかりすぎたため、この車両はライン川を越えるまで戦闘には参加しなかった。第 11 機甲師団の装甲連隊と装甲偵察連隊でのみ使用され、この師団ではすべてのシャーマンをコメットに置き換えていた。1944 年 4 月から 45 年 5 月までの間に、およそ 1,200 両のコメットが生産された。戦争終了後数年で、コメットはセンチュリオンにとって代わられていった。センチュリオンは最初の 6 両が 1945 年の 5 月にドイツに登場した戦車で、戦闘に参加するにはあまりにも遅すぎた(ゆえに、ASL にセンチュリオンは含まれていない)。

†この AFV には sD と sM が両方搭載されている。コメットを指揮するプレイヤーは、プレイヤーターンにどちらか(両方は不可)の煙幕発射器を選んで使用できる。どちらを用いるのか宣言してから、発射の試みを行うこと。煙幕発射器に関するその他のルールはすべて適用される。

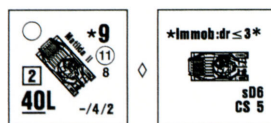
†1945年4月 - 5月(1.3) BPV=79



●(A11)マチルダ I [歩兵戦車 Mk I] : これはイギリス軍の最初の歩兵(“I”)戦車である。歩兵戦車の唯一の任務は、歩兵に随伴してこれを支援することであった。マチルダの設計にあたっては、特に小さい(すなわち目立たない)が重装甲であることが要求されていた。ただし、最高速度は歩兵の速さを上回る必要がないとされていた。生産に費用がかからないこともまた、非常に重要な要素であった。マチルダ I の生産は 1937 年から始められ、140 両が完成した。その内 77 両は第 4 および第 7 王立戦車連隊に配属され、第 1 陸軍戦車旅団の戦車兵力の中核としてフランスに渡った。ドイツ軍の 37mm 砲には十分に耐えることができたが、5 月の終わりには、これらの車両のほとんどは撃破されるか放棄されていた。イギリスに残った 63 両のマチルダ I は、訓練に用いられた。

†道路の移動コストは最低でも 1MP である ; すなわち、CE 状態であっても道路を 0.5MP では移動できない。このことは、カウンターに “Road Rate NA” と記載されている。

†使用期間と RF は、1938 年 - 40 年 5 月(1.3)。BPV=26。



●(A12)マチルダ II [歩兵戦車 Mk II] : 歩兵戦車 Mk II は、Mk I よりは高速でかつ重装甲であり、1940 年当時のあらゆるドイツ戦車を撃破可能な主砲を搭載していた。マチルダ I が

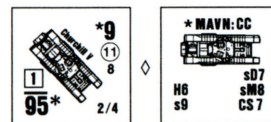
就役中はしばしばマチルダシニアと呼ばれていたが、後に単に “マチルダ” と呼ばれるようになった。その重装甲と(外側を覆う装甲板によって)防御効果を高めた履帯により、事実上、何物を相手にしても不死身の存在であった。フランスのアラスで、ドイツ軍の 88 に遭遇するまでは。(実際、ドイツ軍の APCR 開発開始は、フランスでマチルダの重装甲を経験したことに対する反応であった。)北アフリカでは、1940 年末のイタリア第 10 軍の潰走時に重要な役割を果たした後、“戦場の女王”の称号を授けられた。

1941 年のドイツ軍戦車兵でさえ、何らかの圧倒的優勢が無ければ、マチルダとの遭遇を嫌がっていた。この状況をイギリス軍は「マチルダアレルギー(Matilda-itis)」と呼んでいた。しかしながら、砂漠の機動戦に不向きな低速と主砲の強化が不可能であったこと、さらには致命的な 88 の存在によって、最終的には女王の座から退くことになった。フランスでは 23 両のみが使用され、すべて第 1 戦車旅団に所属していた。北アフリカでは大量に使用され、第 1 及び第 32 戦車旅団で行動した。加えて、第 4 王立戦車連隊がエルトリアでマチルダを使用し、第 7 王立戦車連隊が 8 両のマチルダを用いてクレタ島で戦った。太平洋ではオーストラリア軍がマチルダを使用し、初陣はニューギニア、後にブーゲンビルとボルネオでも用いられた。太平洋戦域のために、火炎放射器型も開発され、そのうちの数両は 1945 年の 7 月から 8 月にかけて投入された。2,987 両のマチルダ II が生産された。

戦争を通じて、歩兵戦車の各トループ(小隊に相当 : 1941 年より前にはセクションと呼ばれた)は、同型の “I” 戦車(マチルダ II, バレンタイン等)3 両から編成されていた。CS(Close Support)型は通常太平洋で戦うトループでのみ見受けられ、オーストラリア軍では、2 両の 2 ポンド砲搭載型と 1 両の CS 型によってトループを編成していた。一般的に、歩兵戦車が利用できる時には、攻撃を行う各歩兵中隊につき 1 トループが随伴した。驚くべきことに、1940 年の戦車旅団一歩兵の作戦に随伴し、最前線に装甲支援を与えることを目的に編成された部隊—には、ただの 1 つも HE 弾を発射可能な兵器が配備されていなかった。この状況は、1941 年の初頭に、遅まきながら部分的に改善された。各スコードロンにつき、数量の CS 型歩兵戦車が追加されたのである。

†何らかの攻撃(正面、もしくは後面からの迫撃砲以外による攻撃は除く)によって、“走行不能”の結果が生じた場合、直ちに追加の dr を行う。dr3 以下で実際に走行不能が生じるが、4 以上の場合は効果無しとなる。このことはカウンターに “Immob:dr ≤ 3” と記載されている。

†フランス: 1940 年 5 月 (1.4) クレタ島: 1941 年 (1.5) 北アフリカ: 1940 年 12 月(1.1), 41 年 1 月(1.3), 41 年 2 月(1.4), 41 年 3 月(1.5), 41 年 4 月(1.3), 41 年 5 - 12 月(1.2), 42 年 1 - 4 月(1.3), 42 年 5 月(1.4), 42 年 6 月(1.5), 42 年 7 月(1.6) 東アフリカ(エルトリア) : 1941 年 1 - 4 月(1.3)
PTO : 1943 年 11 月 - 44 年 2 月 / 1945 年(1.2) BPV=51

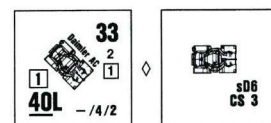


●チャーチル V : これはチャーチル IV に CS 型の役割を持たせるべく、榴弾砲を搭載したものである。ETO での戦車旅団でのみ用いられた。英軍製戦車で編成された戦車連隊所属の

戦車大隊では、公式には各スコードロンの HQ につき 2 両の CS 型戦車が配備されていた。初期の CS 型戦車の大半は、煙幕弾しか発射できなかった。HE 弾が射撃可能なタイプであっても、英軍の戦車ドクトリンに従って、その搭載する HE 弾の数は僅かなものだった。後期には(チャーチル V のように)煙幕弾の数を減らし、多くの HE 弾を積むようになった。

†この AFV には sD と sM が両方搭載されている。チャーチル V を指揮するプレイヤーは、プレイヤーターンにどちらか(両方は不可)の煙幕発射器を選んで使用できる。どちらを用いるのか宣言してから、発射の試みを行うこと。煙幕発射器に関するその他のルールはすべて適用される。

†使用期間と RF は以下の通り。1944 年 5 月 - 45 年 5 月のイタリア(1.6)。北西ヨーロッパでは、1944 年 6 - 7 月(1.4), 8 月(1.3), 9 月 - 45 年 3 月(1.4), 1945 年 4 - 5 月(1.5)。BPV=67。



●ダイムラー装甲車 : この車両はダイムラー偵察車の素晴らしい性能に触発され、より大型の装甲車にするべく作られたものである。そのため、両車両のデザイン的な特徴は多くの点で似通っていたが、装甲車タイプの方がより洗練されていた(例えば、緊急事態に車長が使用するための後進用ハンドルが付けられていた)。火力の点でも、ダイムラー装甲車はより初期のイギリス軍装甲車よりもはるかに優れていた。1940-41 年当時に、歩兵戦車や巡航戦車に搭載されていたのと同じ 2 ポンド砲を装備したテトラーク軽戦車(軽戦車として開発され、巡航戦車として受注され、軽戦車としてアフリカに送られたが熱帯向きで

はなく、最後には空挺戦車として空挺師団に配備された」と同じ砲塔を乗せていたのである。不幸なことに、ダイムラー装甲車の生産は、ドイツ空軍の空襲のために度々深刻な遅延が生じ、結局1942年の半ばまで実戦には投入されなかった。アフリカでは、国王竜騎兵レジメントと王立竜騎兵レジメントで使用された。そこでの1個トループは、1両のダイムラー装甲車と2両のモーマン・ヘリントン装甲車（もしくはハンバー装甲車）で構成されていた。チュニジアでは、いくつかの増派装甲車レジメントにダイムラーが配備されていた。北アフリカ戦役が終わるころ、装甲車レジメントの編成が変更された。1個トループが2両の装甲車と2両の偵察車から構成されるようになったのである。そしてその両方が『ダイムラー』であった。ダイムラー装甲車は、インド・ビルマ戦域でも第11（アルバート・ビクター王子の）騎兵隊においても使用された。2,694両が生産され、そのうちのいくつかは1960年ごろまで現役であった。

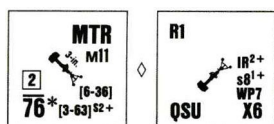
†PTO 以外：1942年7 - 8月(1.5), 1942年9 - 10月(1.4：マダガスカルでは使用していない), 1942年1月 - 43年5月(1.3), 1943年6月 - 1945年(1.2)インド・ビルマ：1944年6月 - 1945年(1.3) BPV=42

イギリス軍 砲兵器ノート



●●● OML 2インチ迫撃砲：この『砲口装填式砲兵器(Ordnance Muzzle Loading) 2インチ迫撃砲』は、もともとはスペインの設計を流用したものであった。緊迫した国際情勢を受けて、

最低限のテストをただで1938年には製造が開始された。にもかかわらず、この兵器は第2次世界大戦を通してよく働いた。射程が短いという欠点は、煙幕弾と照明弾の射撃能力により、少なくとも部分的には補うことができた。歩兵（パラシュート兵およびグライダー兵を含む）小隊、迫撃砲小隊、歩兵偵察スコードロンの突撃トループ、装甲車スコードロンの支援火器トループの、各HQに1門の2インチ迫撃砲が配備されていた。1943年の後半には、対戦車連隊の各対戦車砲トループにつき、2門の2インチ迫撃砲が公式に配備された(17ポンド砲の対戦車砲トループでは、それが自走式か牽引式かに関わらず、トラックによって運搬された；イギリス軍車両ノートの66を参照)。2インチ迫撃砲には14ものバリエーションが存在したが、中でも最も特筆すべき働きをしたのは、より軽量・短砲身の空挺バージョンで、主にパラシュート歩兵によって使用された。

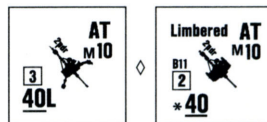


●●● OML 3インチ迫撃砲：1917年に配備が始まった『ストックス3インチ塹壕迫撃砲』は、近代的な歩兵迫撃砲の先駆けであった。1939年には改良型のMk II が広く配備されていた

が、枢軸国の同等の迫撃砲よりも射程の面で劣っていた。弾薬、および後の迫撃砲自体の改良により、この問題は部分的な解決を見た。1940年の歩兵大隊はわずかに2門の3インチ迫撃砲を有するだけだったが、1941年には6門からなる迫撃砲小隊が増強された。同様に、1941年の段階では2門の配備にとどまっていた歩兵偵察大隊にも、1942年には6門からなる迫撃砲小隊が増強された。一部の自動車化大隊は、戦争開始時に各中隊につき2門の迫撃砲を有していたが、その他の多くの大隊は1942年になるまでこの砲を有していなかったことが明らかである。1944年のグライダー大隊は、4門の3インチ迫撃砲からなる迫撃砲小隊を持っていたが、それに加え、4個の各中隊にはそれぞれこの砲が2門以上配備されていた；1945年の初めには、全ての大隊レベルの部隊には4門編成の迫撃砲小隊が3個配備されていた。3インチ迫撃砲は、インド/ビルマ戦域でも同様に広く配備されていた：1943年の軽山岳砲兵連隊およびジャングル砲兵連隊には、16門編成の3インチ迫撃砲中隊が配属されていたし、1944年では対戦車/対空連隊も同様であった。ビルマでは、各チンデット中隊が公式に2門の3インチ迫撃砲を装備していた。

†この砲の初期の射程は6 - 36 であるが、1942年9月から3 - 63 となる。このことはカウンター上では“[3-63] S2”と記載されている。

†PTO 以外：1940年4月 - 41年3(1.3), 41年4月 - 10月(1.2) [例外；41年5月のクレタ島での使用に関しては1.3と見なす], 41年11月 - 45年5月(1.1) PTO：1941年12月 - 42年10月(1.3), 42年11月 - 43年11月(1.1), 43年12月 - 44年10月(1.0), 44年11月 - 45年(0.9) BPV=25



●●● OQF 2 ポンド対戦車砲：素早い全周旋回が可能な三脚架に載せられたこの砲は、1939年に配備されていたものの中で、最高の対戦車砲であった。しかしながら、フランス戦で509

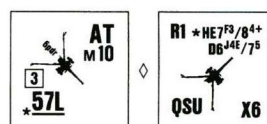
門の2ポンド砲を失い、事実上陸軍の対戦車砲が壊滅してしまったため、イギリスは次の年からも2ポンド砲の生産を優先せざるを得なくなった(そのため、6ポンド砲の開発の遅延を招いた)。砂漠戦の初期においては2ポンド砲の働きは全体として十分なものであったが、ドイツ戦車の装甲が厚くなるにつれ、それらに打撃を与える見込みは少なくなる一方だった。さらに、ドイツ軍は2ポンド砲の位置を知ると、可能ならば4号戦車を2ポンド砲の有効射程外に置き、屈服するまでじっくりと榴弾を撃ち込んでくるようになったのである。1942年には、2ポンド砲は危険なまでに旧式化した代物だった。にもかかわらず、チュニジア陥落までこの部隊は戦い続けた。砂漠では、2ポンド砲の一般的な輸送手段は“ポーター（トラックの荷台に搭載する方式）”であった。PTOでは、戦争を通じて用いられたが、1943年のインド・ビルマ戦線では、公式には軽師団所属の対空/対戦車連隊にのみ配備されていた。

2ポンド砲は4門で1トループを構成し、対戦車連隊で使用された。また、1942年の初頭には、歩兵および自動車化大隊の各々につき、2ないし4個の対戦車砲小隊が配属されるようになった。1942年から北アフリカの戦闘に参加した歩兵偵察連隊では、1トループが6門の2ポンド砲で編成されていた。これは後に6ポンド砲に置き換えられた。他の多くの英軍の砲と同じく、2ポンド砲も発射される砲弾の重量から名前が付けられていた。“OQF”とは、“Ordnance, Quick Firing”の略称で、砲弾と発射用炸薬が一つにまとめられた弾薬を利用するという意味であった。厳密に言えば2ポンド砲用のHE弾は存在したが、あまりにも威力が弱く広く支給されていなかった。このことは2ポンド砲を主兵装とするAFVにも当てはまる。

†ETO フランス：1940年5 - 6月(1.2) ギリシャ：1941年4月(1.2) クレタ島：1941年5月(1.5)

北アフリカ：1940年6月 - 41年4月(1.3), 41年5月 - 42年3月(1.2), 42年4 - 6月(1.1), 42年7 - 12月(1.0), 43年1 - 5月(0.9)

PTO: 1941年12月 - 42年2月(1.3), 42年3 - 6月(1.5), 42年7 - 8月(1.4), 42年9 - 10月(1.3), 42年11月 - 43年11月(1.2), 43年12月 - 45年(1.3) BPV=30。



●●● OQF 6ポンド砲：この砲の設計は1938年には完了していたが、フランス降伏後に2ポンド砲の必要性が急激に高まったため、1941年の後半まで十分なテストができていない状態であった。1942年5月のガザラの戦いに間に合うように北アフリカの自動車化大隊に配備されたが、その時点では操作員の訓練不足から衝撃的なデビューとはならなかった。その直後から対戦車レジメントがこの砲を受領し始め、4門で1個トループを編成して使用した。第2次アラメインの戦い

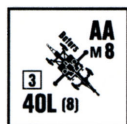
のときには、歩兵師団の対戦車レジメントの所有する対戦車砲の（平均して）4分の3と、機甲師団のすべての対戦車砲が6ポンド砲になっていた（このうちいくつかは後にディーコン自走砲になった）。北アフリカの対戦車レジメントは、1942年の末から43年にかけて、レンドリースによってアメリカ製の57mm 砲も受領している。歩兵大隊では1943年から2ポンド砲と6ポンド砲の切り替えが始まり、北アフリカ戦役終了時にヨーロッパに派遣されることになった大隊の支援中隊には、6ポンド砲6門から成る対戦車小隊が配備された。北アフリカでは、自動車化大隊は16門（4個小隊）の6ポンド砲を有していたが、1944年のETOでは3個小隊に減少された。1944年の空挺大隊は6門の6ポンド砲から成る対戦車小隊を2個有していたが、1945年の初めには1個小隊の門数は4に減らされた。PTOでは対戦車レジメントでのみ使用されている。1945年のイタリア侵攻時には、6ポンド砲は“ポーター”の形式で運用されたが、のちにロイドキャリアーによる牽引方式に改められた。6ポンド砲は、1980年代においても少数の国でわずかながら現役であった。

†HE 弾（弾薬欠乏ナンバー“7”）は1943年2月から使用可能となり、このことは“HE7F3”で表されている。“8”の欠乏ナンバーは1944 - 45年のものであり、これは“8+”で表されている。カウンターに記載されたHE

欠乏ナンバーは、PTO では3増加する；すなわち、PTOではHE7はHE10に増加するのである。太平洋戦域 (PTO) では1945年以降使用可能となる。この制限は、カウンター上では6月 (June) をあらわすJ と、ETOをあらわすE で示されている。ETOでの使用期間は43年7月から45年5月までであり、PTOでの使用期間は44年から45年の終わりまでである。APDS弾 (弾薬欠乏ナンバー “4”) は、ヨーロッパ戦域 (ETO) では1944年の6月 (June) から使用可能であり、このことは “D6^{J4E}” と記載されている。

†PTO以外 (マダガスカルでは使用していない) : 1942年5 - 6月(1.5), 7月(1.4), 8月(1.3), 9月(1.2), 10 - 12月(1.1), 1943年1 - 5月(1.0), 1943年6月 - 1945年5月(0.9)

PTO : 1943年5 - 11月(1.3), 1943年12月 - 1945年(1.1) BPV=34

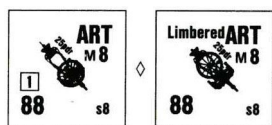


●OQF 40mm ボフォース対空砲：イギリス軍は1938年にボフォース対空砲を採用し、スウェーデン (オリジナルの開発国)、ポーランド、ハンガリー、そしてベルギーから大量に購入した。1941年までには、イギリスの工場が大量生産を始めており、カナダとオーストラリアもそれに倣った。ボフォース対空砲は、戦争の全期間を通じ、あらゆる戦場での軽対空連隊の主装備であった。1射撃とループは、初期には4門の砲で構成されていたが、1943年には6門に増強された。ボフォース対空砲は、現在でも12カ国以上の軍隊に配備されている。

†ETO : 1940年4月(1.5), 40年5 - 6月(1.3)[ノルウェイでは1.4], 41年4 - 5月(1.3), 43年7月 - 45年5月(1.2)。

北アフリカ : 1940年6月 - 41年4月(1.3), 41年5 - 10月(1.2), 41年11月 - 43年5月(1.1)[マダガスカルでは1.3]。

PTO: 1941年12月 - 42年2月(1.4), 42年3 - 6月(1.6), 42年7 - 8月(1.5), 42年9 - 10月(1.4), 42年11月 - 45年(1.3)。 BPV=40



●OQF 25ポンド砲：1920年代半ばから18ポンド砲と4.5インチ榴弾砲を単一の砲に置き換える実験的な設計が行われてきたが、それらの努力の結晶である25ポンド砲の認可が完全に下りるのは1939年の半ばまで待たねばならなかった。とはいえ、その年の初めには18ポンド砲後期モデルの砲身内管を新型の87.6mm口径のものに換装し始めていた。こうした換装は1000以上行われ、その砲は25ポンド砲Mk Iと呼ばれた (一般には18/25ポンド砲と呼ばれた)。それらはフランスのBEFの野砲レジメントに最も多く配備され、そこでは704門のMk Iが失われた。Mk Iは北アフリカでも使用されたが、PTOでは用いられていない。ゲーム上、Mk Iと真の25ポンド砲であるMk IIとの違いは、Mk Iの最大射程が275ヘクスに制限されていることのみである。

25ポンド砲Mk IIは、ノルウェイで初めて実戦投入されたが、ETOではその後1941年まで使用されなかった。アフリカに初登場したのは1941年初頭であった。2ポンド砲よりも強力な砲の必要性から、北アフリカ戦役が進むにつれ、25ポンド砲レジメントは次々と分割され、様々な種類の部隊や機動コラムに固有の砲兵小隊/中隊として振り分けられた。25ポンド砲は対戦車砲としても活躍した (そのために重要な要素である独特な円形の砲床を備えていたため) が、そのような使用法は、必要なときに集中砲撃を行うという野砲部隊としての任務に深刻な悪影響を及ぼした。6ポンド砲が登場するに及んで、25ポンド砲は完全に本来の任務に集中することができるようになった。

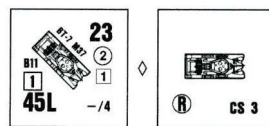
量産体制に入ると、25ポンド砲はあらゆる戦域の野砲レジメントに配備され、PTO以外の地域では歩兵師団における標準の (かつ唯一の) 砲兵装備となった。この砲の1個トループは4門で構成される。12,000門以上のMk IIがイギリスで生産され、さらにオーストラリアで1,527門、カナダではそれ以上の数が生産された。ドイツアフリカ軍団はこの砲を少なからず鹵獲使用し、ETOではわずかな米軍砲兵隊が25ポンド砲を装備した。25ポンド砲は朝鮮戦争にも実践参加し、1967年までイギリスの1線級部隊にとどまり続けた。1980年代においても、12カ国以上の砲兵器工場で25ポンド砲が生産されていた。

†ETO ノルウェイ : 1940年5月(1.6) ベルギーおよびフランス : 1940年5 - 6月(1.3) ギリシャ : 1941年4月(1.3) クレタ島 : 1941年5月(1.6) その他のETO : 1943年7月 - 45年5月(1.3)

北アフリカ : 1940年6月 - 41年2月(1.5), 41年3 - 4月(1.4), 41年5 - 10月(1.3), 41年11月 - 42年12月(1.2 : マダガスカルでは使用していない), 1943年1 - 5月(1.3)

PTO : 1941年12月(1.3), 1942年1月(1.4), 42年2 - 5月(1.5), 42年6 - 10月(1.4), 42年11月 - 45年(1.3) BPV=42

ソ連軍 車両ノート

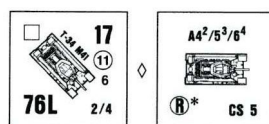


●BT-7 M37 : BT-7 シリーズは、BT-5の近代的改修型である。再設計された前面装甲、新型砲塔、より多くの機関銃、そして新しいエンジンと走行装置が備わっていた。M37 (ソ連側

史料ではM38) は新型砲塔が導入されたタイプである。また、逐次後部砲塔機銃と対空機銃が追加された (このタイプのカウンターは、SKには同梱されていない)。この追加武装を装備した形式をBT-7Mと呼称する場合があるが、BT-7Mの最大の特徴はそれまでのM17 ガソリンエンジンからV2ディーゼルエンジンに換装したことであった。不幸なことに、これらの改修を経ても、前時代的な設計であるBTシリーズの生存性を高めることはかなわなかった。2,000両以上のBT-7が生産された。BTシリーズの設計の最も重要な点は、その後いくつかの試作型を経てはいるものの、T-34の直接の先祖となったことである。

†この車両は「失速」の可能性もある。ソ連軍車両特記事項「失速」を参照。

†1939年 - 41年7月(1.0), 8月(1.1), 9月(1.2), 10月(1.3), 11月(1.4), 12月(1.5) BPV=34

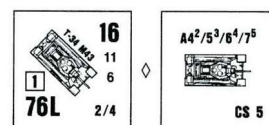


●T-34 M41 : M41型は、より長砲身の41.2口径F-34を新型砲塔に装備したものであり、当初は小隊および中隊指揮官用車両として使用すべく予備とされていた。しかし、前線からの

より強力な砲を求める要請にこたえ、1940年型に変わって大量生産されることになった。ゲームのカウンターは、いくつかの小規模改修が行われたM42型も表している。ソ連軍の中戦車小隊は一般に3両編成であり、中隊には10両の戦車が配備されていた。

†この車両は「失速」の可能性もある。ソ連軍車両特記事項「失速」を参照。

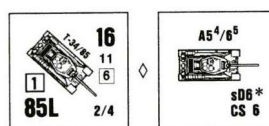
†1941年6 - 7月(1.5), 41年8 - 9月(1.4), 41年10 - 11月(1.3), 41年12月 - 1942年1月(1.2), 42年2 - 3月(1.1), 42年4 - 5月(1.0), 42年6月 - 44年(0.9) BPV=55



●T-34 M43 : M43型 (1942年からその姿を見せ始める) の特徴は、容積の大きな6角型の新型砲塔の装備と、駆動系の信頼性が増したことであった。また、このタイプはT-34/76シ

リーズで最も多くの生産されたものであった。1944年に生産が終了するまでの間に、各形式を合わせて、35,000両以上のT-34/76が生産された。

†1942年10 - 12月(1.4), 1943年1 - 2月(1.3), 3 - 4月(1.2), 5 - 6月(1.1), 7 - 8月(1.0), 1943年9月 - 1945年(0.9) BPV=59

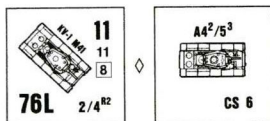


●T-34/85 : 1943年半ばに、パンターやティーガーといった新世代のドイツ戦車と遭遇したソ連軍は、米軍と同様に自軍戦車の砲の能力の低さを知った。この問題の解決策がT-34/85

であり、より強力な85mm砲を新型の3人用砲塔に装備していた。初の実戦投入は、第1親衛戦車軍においてであった。WW2を通じて、およそ29,430両が生産された。

†この車両のsDは、シナリオ中1回のみ煙幕を張ることができる。

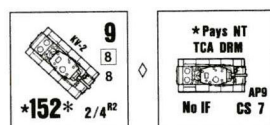
†1944年4月(1.5), 5月(1.4), 6月(1.3), 7月(1.2), 1944年8月 - 1945年(1.1) BPV=76



●**KV-1 M41** : KV の装甲強化はバルバロッサ作戦以前より開始されていた。これは、ドイツ軍がその戦車砲を大に強化しているという誤った報告に基づいてのものだった。加えて、新たなドイツ軍の兵器や弾薬に遭遇したことで、ソ連軍は多くの生き残った旧式のKVに対し、種々の増加装甲を含めた改修や改造を施すことになった。これら各種の追加は重量を増加させ、さらなる機動力の低下を招いた。前線からはより軽装甲の機動的な戦車が求められていたが、重戦車が致命的に不足していたため、現行型の生産と便宜的改修が続けられた。より軽快なT-34と併用した場合、作戦の妨げになることがあったため、KVは1942年7月から21両編成の独立重戦車連隊として分離されることとなった。

†この車両は「失速」の可能性がある。**ソ連軍車両特記事項「失速」**を参照。

†1940年7月 - 1943年(1.2) BPV=55

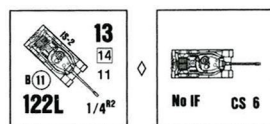


●**KV-2** : この弩級戦車は、1939年の対フィンランド戦で必要性が認められた“掩蔽壕破壊兵器 (Bunker-Buster)”として設計された。固定された砲座などの目標に対しては有効な兵器であったが、その重鈍な巨体は1942年の機動防御線には全く不向きなものであった。ゆえに、この戦車の生産はすぐに打ち切られたのだった。

†KV-2の砲塔は旋回が大変困難で、特に斜面上ではその傾向が顕著だった。ゆえに、この戦車はNT AFVとして扱われる。TCAの変更は可能であるが、適用されるDRMがNTの旋回ペナルティのものになるのである。

†この車両は「失速」の可能性がある。**ソ連軍車両特記事項「失速」**を参照。

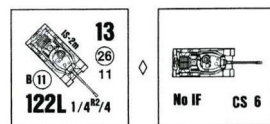
†1941年(1.3) 1両のプロトタイプが1940年2月のフィンランド、スーマ近郊の戦いで実戦に投入されている。 BPV=41



●**IS-2** : IS (ヨシフ・スターリン) 重戦車は、再設計されたKVの車体と車台に、新設計の3人砲塔を搭載したものである。プロトタイプには85mm砲、もしくは新しい100mm砲が搭載

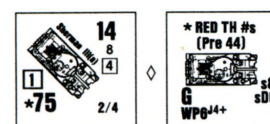
されていたが、生産型は強力なHE射撃力と生産性から122mm砲が搭載されている。この生産型は西側では今まで一般にJS-1と呼称されていた。**IS-1は85mm砲搭載型のこと(当初の呼称はIS-85)で、100両程度が生産され、実戦にも投入(1944年2月、チェルカッシー)されている。生き残りのIS-1はすべて砲塔が換装され、IS-2に改修された。100mm砲搭載型はプロトタイプのみであり、IS-100と呼ばれていた。IS戦車は当初21両編成(中隊は5両、小隊は2両からなる)の独立重戦車連隊に配備された。**

†1943年3月 - 1945年(1.3) BPV=83



●**IS-2m** : IS-2mの主な特徴は、傾斜のついた一体型の車体上部構造である。これは操縦手用のパイザーブロックという、IS-2の弱点に対する改修であった。独立重戦車連隊への配備の他に、65両編成の独立重戦車旅団にも配備された。IS-2は各形式合わせて3,854両が生産された。IS-2mは、西側で今までJS-2と呼称していたものである。ISシリーズの主な戦術上の欠点は、非常に低い発射頻度と、28発の砲弾しか搭載できないが故の弾薬不足であった。

†1944年7月 - 1945年(1.2) BPV=87

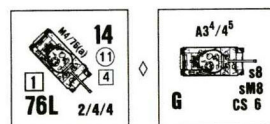


●**シャーマンIII(a)** : 1942年9月、およそ200両の75mm砲型シャーマンIII(M4A2)の最初の船積みが行われた。その後、1943年7月までは船積みされなかったが、それからは1944年まで続いた。1944年12月31日までの間に合計で1,991両のM4A2と2両のM4A4が届けられた。ソ連軍は当然のごとくシャーマンをT-34

より劣るとみなしていたが、その信頼性には驚嘆せざるを得なかった。なぜなら、シャーマンにはT-34が機械的故障をせずに走行できる距離の3倍を走ることが期待できたからである。

†1944年よりも前(すなわち1943年以前)ではMAのTH#は赤色を使用するが、1944年以降は黒のTH#を使用する。このことはカウンター面に“Red TH#s(Pre44)”と記載されている。

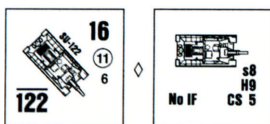
†1943年(1.5), 1944 - 45年(1.4) BPV=68



●**M4A2/76(a)** : ソ連軍は戦争の最後の2年間に於いて、他のどのレンドリース車両よりも多くのシャーマンを使用した。M4A2/76(w)の船積みは1944年5月から始まり、**最終的には2,095両が送られた。**この形式は、ソ連に送られた唯一の76mm砲搭載型であった。**いくつかの戦車/機械化軍団はシャーマンのみを装備していた。**その一例が1945年における第1親衛機械化軍団である。この車両はジャイロスタビライザー(D11.1)を装備可能であり、2インチ煙幕迫撃砲(sM8)を標準装備していた。

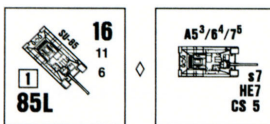
†この車両の76Lは黒のTH#を用い、米軍のAP/APCR弾のTK#を用いる。

†1944年(1.5), 1945年(1.4) BPV=76



●**SU-122** : T-34の車台と車体に、M-30S野砲を搭載した突撃砲である。初期にはSU-76と共に用いられたが、1943年の半ばから、SU-122は16両(後に21両)から成る独自の中型自走砲連隊を編成していた。各自走砲兵中隊は、この車両4両から成っていた。1942年から44年の間に、1,148両が生産された。

†1943年2月 - 45年(1.3) BPV=59



●**SU-85** : SU-85は、後期のドイツ軍AFVに対抗するべく、強力な85mm対空砲に換装されたSU-122である。16両(1944年からは21両)から成る戦車駆逐大隊を編成し、ドニエプル河への攻撃時にその初陣を飾った。T-34/85の登場とともに、SU-85の85mm砲は不要となり、より強力なSU-100の生産へと移行した。2,050両のSU-85が生産された。

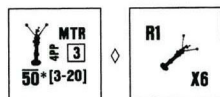
†RFは1943年9月 - 44年(1.3)。BPV=54。

†ソ連軍車両特記事項「失速」

戦争初期におけるソ連軍装軌式AFVは、悪名高い貧弱な変速機を搭載していた。故障がちであるばかりでなく、変速切り替えが大変困難だったのである。実際、多くの車両が標準装備として大型のハンマーを備えており、操縦手はシフトレバーに対して動くよう「説得」するためにそれを使用したのである。

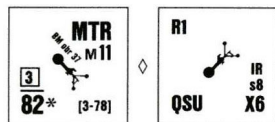
このため、これらの車両が機械的信頼性DRで11を出した場合、そのAFVは失速もしくは変速機の不調により始動に失敗したものとみなす。その場合再びDRを行い、その目が失速時に遅延MPとしてそのAFVが無為に消費(停止に必要な1MPを含むが、始動に用いた1MPは含まない;例えば、始動を宣言してDR11を出し、さらに追加DRで5を出したAFVは、合計6MPを無為に消費してまだ停止しているのである)してしまったMPとして適用する。失速した車両は、MPが残っていれば再度始動を試みることができるが、そのたびに機械的信頼性(失速)DRを行わねばならない。失速した車両も、始動のための1MPを消費した時点で自身のMPHを開始しているので、臨機射撃の目標になりえる。ただし、そのMPH中に新たに別のヘクスに移動していないのなら、『移動した目標』とみなされることはない。失速による遅延MPが、その車両の残りのMPを上回った場合、その車両は残りのMPを遅延に用いてMPHを終えたものとみなす(超過分は無視する)。

ソ連軍 砲兵器ノート



● **50mm RM obr.40** : この迫撃砲は、複雑すぎた38, および39 型に代わって、ソ連軍の標準的中隊迫撃砲となった。その設計は非常に簡素で、射撃時の仰角は45°と75°の2つにセット

できるだけであった（一部の史料では82°にもセットできたとある）。砲身基部に調節可能な排気弁が付いており、発射ガスを逃がすことができた。これにより、仰角の調整なしで射程を短くすることができたのである。大量のRM40（およびその後継の50mm RM obr.41）が生産された。しかし、ドイツ軍と同様に、軽迫撃砲は破壊力にかけられるために徐々に支持を失い、戦争の進展とともに使用されなくなっていく。



● **82mm BM obr.37迫撃砲** : フランス製プラント中迫撃砲を、若干の再設計を施してコピーしたもの。この兵器は標準的な大隊支援用に使用された。より後期のモデル（41および43

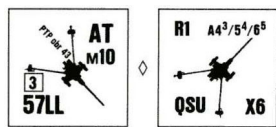
型）には車輪が取り付けられており、そのため、長距離移動の際に迫撃砲そのものを分解する必要がなくなった。

†1939 - 41年(1.1), 1942年(1.3), 1943 - 45年(0.9) BPV=28



● **45mm PTP obr.32 対戦車砲** : 基本的には、砲身を45mmに換装した37mmPTP30 対戦車砲である。この砲が登場した時点では、対戦車砲としては世界で最も強力なものであった。後継モデルの37 型と共に、この砲は第2 次世界大戦前半における赤軍の対戦車防衛の中核を成していた。軽対戦車小隊は2 門の砲から成り、2 ないしは3 個小隊で中隊を編成していた。大隊は総計で6 個の小隊を有していた。

†1939 年 - 45 年(1.0) BPV=29



● **57mm PTP obr.43対戦車砲** : この砲は1941 年春にobr.41 として登場したが、その数は極めて少なかった。その後、若干の改良を施して1943 年に再配備され、戦後のソ連でも幾年にもわたって使用が続けられた。ZIS-2 としても知られている。

†1941 - 42年(1.6), 1943 - 45年(1.3) BPV=36



である7.5cm leIG 18 と比較して、その単純な構造と長射程を評価していた。ゆえに、この砲はすべての戦線にわたってドイツ軍に鹵獲使用された。そのうちの多くが、ドイツ軍が特別に生産した照準器と砲弾を使用していた。

†1939 - 45年(1.0) BPV=30

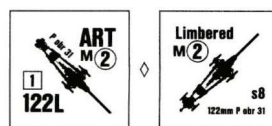


● **76.2mm PTP obr.39榴弾砲** : 76 - 39 とも呼ばれるこのソ連製の野砲は、対戦車能力も備わるように設計されていた。より軽量で、人力による扱いが容易だったため、76 - 36 型

への代替として期待されていた。ゲームのカウンターにはより後期の42 型（76 - 42）が含まれており、これは新しい砲架とマズルブレーキを備えたものであった。この2 つのタイプの砲は、戦争を通じてソビエトの標準的な軽野砲／中対戦車砲となった。1 個中隊は4 門の砲から編成されていた。これらの砲は戦争終結後も何年間も使用され、現在でも幾つかの軍隊では現役の座にとどまり続けている。高初速の76mm 砲は、ドイツ軍から“crash - boom（クラッシュ - ブーン：破壊 - 砲声）”とあだ名された。超音速の砲弾が目標で爆発した後に、砲弾の飛来音が聞こえるためである。超音速の砲弾を発射する砲は全て“crash - boom”と呼ばれても良いわけだ

が、このあだ名が付けられたのは初期の76mm 砲だけだった。この砲との遭遇がそれだけ一般的だったからである。

†1939 - 42 年(1.1), 1943 - 45 年(0.9) BPV=35

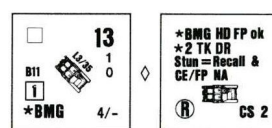


● **122mm P obr.31榴弾砲** : この砲は122-31 としても知られており、完全なソ連オリジナルの設計であった。一時期、152mm 榴弾砲（152-10/34 型）の砲架が用いられた。後期型（122-

37 もしくはA-19）とともに、この砲は野砲師団、もしくは独立野砲旅団で用いられた。2 門で中隊を構成し、6 門で大隊を構成していた。A19 にいくつかの改良を施したものが、ISU-122 突撃砲、ならびにIS 重戦車に搭載された。

†1939 - 45 年(1.3) BPV=44

イタリア軍 車両ノート



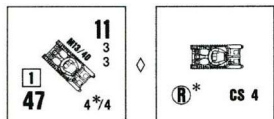
● **L3/35** : このAFV はイギリスの『ガーデンロイドMk VI』から派生したものであり、1933 年に始めて現れた。原型はCV33（Carro Veloce；快速戦車）と呼ばれ、6.5mm 口径機銃を1

丁装備していた。その後車体に若干の改修（溶接構造からリベット構造になった）がなされ、後期型ではタンデム配置（縦型2 連装）の2 丁の8mm 口径機銃を装備していた。1935 年から生産された形式はCV35 と呼ばれ、その後もいくつかの小改修が施された（ゲームにおいては改修前後の差はないものとする）。1938 年に、これらの車両はそれぞれL3/33 とL3/35 に呼称変更となった。イタリアが参戦した1940 年6 月の時点で、L3 は最も一般的なイタリア軍AFV であった。当時のイタリア軍機甲師団で、このAFV を装備していないのは2 個大隊のみであった。各自動車化師団の戦車大隊、各Celere（快速；意味するところは騎兵）師団の軽戦車スコードロングループ（大隊規模）、多数の独立戦車大隊にもこのAFV が配備されていた。L3 にはいくつかのあだ名があり、その中には“Scatoletta”（小さいカン）や“Cassa da Morto”（死の小箱）といったものも含まれる。すべてのタイプを合わせて2,000 - 2,500 両のL3 が生産された。この車両の1 個小隊は4 両で構成された。

L3 は、イタリア軍部隊が戦ったあらゆる場所で、幾度となく使用された。1935 年10 月 - 1936 年4 月のエチオピア侵略；1937 年2 月 - 1939年3 月のスペイン（149 両が送られた）；1939 年のバルカン；1940 年6月のフランス；北アフリカ（1940 年6 月で320 両が存在しており、その時点で北アフリカの装甲兵力のすべてを構成していた）；イタリア領東アフリカ（1940 年6 月で39 両が存在）；1941 年9 月 - 1942 年1 月のロシア（第3Celere 師団の第3“San Giorgio”軽戦車スコードロングループ）；1943 年7 - 8 月のシシリー島；そして1943 年9 月以降においても、イタリア国内でイタリアファシストとドイツ軍によって使用された。L3 は1930 年代に輸出され、実戦で使用したのはギリシャ、ハンガリー、そして中国である。バルカンにおいては、鹵獲／押収されたL3 がドイツ、クロアチア、そしてユーゴスラビア軍の間で使用されている。

†AP TK 表を用いる場合には、TK DR を2 回行う。そしてそのうちの一つを射撃側が選択して実際に適用する。このことはカウンタース上に“2TK DR”と記載されている。この車両が麻痺（stun/STUN）の結果を受けた場合、いかなる火器も射撃できず、CE になることもできず、帰還せねばならない。このことは“Stun=Recall&CE/P NA”と記載されている。

†北アフリカ：1940年6 - 12月(0.9), 1941年1月(1.1), 2月(1.2), 3月(1.4), 4-11月(1.2), 12月(1.4), 1942年1月(1.5), 2月(1.6) 東アフリカ：1940年7月 - 1941年1月(1.3), 2 - 3月(1.4), 4 - 6月(1.6) 東部戦線：1941 年9 - 10月(1.2), 11月(1.3), 12月(1.4), 1942年1月(1.5) シシリー島：1943 年7 - 8月(1.4) イタリア国内：1943年9月(1.2), 1944 年 - 1945年5月(1.3：ファシストのみ使用) フランス：1940 年6 月(1.1) バルカン：1940年10月 - 1941年4月(0.9), 1941年5月 - 1943年9月(1.1), 1944年 - 1945年5月(1.3：ファシストのみ使用) BPV=20

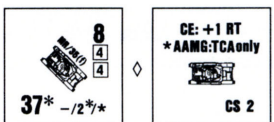


●**M13/40**: M13/40 は、不十分な能力しかなかったM11/39 の代替車両として登場した。この車両は、主たる機械的構造こそM11と同じであるが、全周砲塔に強力な砲を搭載していた

(M11 は37mm 砲を車体に固定装備しており、小さな銃塔に2丁の8mm機関銃を備えただけの武装であった)。低速と信頼性の欠如、車長が砲手を兼ねる2人用砲塔という欠点を持つにもかかわらず、戦車大隊における本車の数量は増加し、1941年には標準的な装備となった。おそらく、WW2において最も有名なイタリア戦車であろう。初の実戦参加はリビアの『サウルム - ハルファヤ地区』において、第3中戦車大隊の使用によるものであった。その後、北アフリカの第132“アリエテ (Ariete: 雄羊)”戦車師団や、1941年1 - 4月におけるギリシャ - ユーゴ戦役では第131“ケンタウロ (Centaur: ケンタウロス)”および第133“リットリオ (Littorio: 鞭 - 権威の象徴)”戦車師団に配備された。1941年初頭の一時期、リビアのイギリス機甲レジメント (第6王立戦車レジメント) が鹵獲したM13/40を配備していたが、ロンメル最初の攻勢を受けてそのすべてが失われた。1943年9月にイタリアが連合国側についたとき、ドイツは本車両を22両押収し、ファシスト兵に与えた。M13/40の生産数は、その後期モデルがM14/41 (機械的な信頼性を増したもの。ゲームではMPを赤の11から黒の12にすることでM14/41となる) として生産されたこともあって史料に混乱が見受けられる。最も数値の大きな史料では1,049両の生産となっているが、別の史料では710両となっている。もっとも一般的な史料では785両である。M13/40 (あるいはM14/41) は、1941年の8月に追加の5両目が配備されるまで、1個小隊4両で編成されていた。

†この車両は1941年11月から無線機を装備する。それより前のシナリオ期間中では無線機を装備していない (SKでは無線機非装備に関するルールはない)。

†北アフリカ: 1940年12月(1.3), 1941年1月(1.2), 2月(1.0), 3月(1.5), 4 - 5月(1.3), 6 - 10月(1.5), 1941年11月 - 1942年6月(1.0), 7月(1.1), 8 - 11月(1.2), 12月(1.6) パルカン: 1941年1 - 4月(1.3), 1941年5月 - 1943年9月(1.6) イタリア国内: 1943年9月(1.6) 1944年 - 1945年5月(1.6: ファシストのみ使用) BPV=34



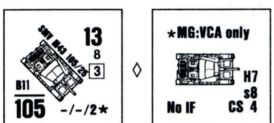
●**MR/35(f)**: ドイツ軍は、1941年から42年にかけて、イタリアに対し旧フランス軍の装備を大量に供給した。その中で最も重要だったのが、124両のルノーR35戦車であった。イタリア

軍はこれに無線機を搭載し、MR/35と名付けた。これらの車両は第101および102中戦車大隊で用いられたが、両部隊ともに1943年夏のシシリー島での戦闘で壊滅した。

†この車両のCE DRMは、迫撃砲の射撃に対して、通常の+2ではなく+1となる。迫撃砲以外の射撃に対しても、それが砲塔後面からのものであった場合、同様にCE DRMは+1となる。このことはカウンターに“CE:+1RT”と記載されている。名称の(f)はフランス製の意味であるが、SKではゲーム上影響しない。

†この車両は、SKではAAMGを装備していないものとする。

†1943年7月(1.2), 43年8月(1.4) BPV=27



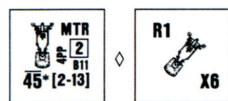
●**セモベンテ M43 105/25**: “Bassotto (パソット; ダックスフントの意)”とも呼ばれた SMV 105/25 は、WW2でイタリアが設計した AFV の中で最も能力の高いものであった。

ももとは P26/40 重戦車の車体とシャーシを利用するはずであったが、この重戦車の開発の遅延により、代わりに M15/42 の改良型を用いることになった。イタリア軍に所属して戦闘を行ったのは、ローマ攻防戦において、第135“アリエテ II”戦車師団の第235対戦車自走砲連隊所属 DCI セモベンテ部隊のみであった (他は大多数がドイツ軍によって使用された)。イタリアの降伏前までに、およそ3ダースほどが生産された。新型の AFV が十分な数だけ使用できるようになった暁には、SMV75/34(SKには含まれてい

ない)が駆逐戦車の役割を果たし、SMV105/25はP26/40重戦車部隊に随伴して近接支援を与えるはずであった。また、SMV105/25は対砲兵射撃にも用いることが予定されており、その際には旧式の (より短射程の) SMV75/18は歩兵支援のために退けられることになっていた。

†1943年9月(1.6) BPV=47

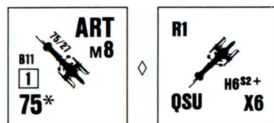
イタリア軍 砲兵器ノート



●**45mm 迫撃砲“ブリクシア”**: この兵器は、イタリア陸軍の標準的な“攻撃/支援用”迫撃砲で、1935年から配備が始まり、同年の東アフリカの戦闘に姿を見せた。この兵器の設計には、一般的ではない—そして過剰に複雑な—特徴がいくつか見られた。砲口から砲弾を落として発射する単純な方式に代わって、次のような複雑な発射方式が採用されていた。まず、レバーを引いて砲尾の最上部を開口し、そこに弾体 (通常の手榴弾の後ろに羽をつけたもの) を手動で装填する。次にレバーを押すと発射炸薬 (10連発のマガジン式であった) が1発分挿入されて、砲尾が閉じるようになっていた。発射は引き金を引くことで行われた。射程は発射角の高さを調整する通常の方法が用いられており、加えて、発射炸薬の燃焼ガスの一部を逃がすためのガス抜き穴も用意されていた。戦闘時における射撃は伏せて行われ、その際射撃手は迫撃砲の後脚に取り付けられているパッドを胸に当てるようになっていた。輸送時には、この後脚は折りたたまれてバックパックのような形で背負われ、その際にはこの胸当てパッドが背中に当たって運搬者の負担を軽減するようになっていた。

この“ブリクシア (Brixia; 設計者の名前)”は、通常この兵器3門から成る迫撃砲分隊で使用された。歩兵大隊には支援火器中隊 (compagnia armi di accompagnamento) が所属していたが、この中隊は迫撃砲分隊3個から成る迫撃砲小隊2個で編成されていた。山岳大隊では、代わりに各中隊につき1個のブリクシア分隊が配属されていた。ベルサグリエリ、騎兵、およびリビア人部隊には、通常45mm迫撃砲は配備されていなかった。いくつかの師団の81mm迫撃砲大隊では、81mm迫撃砲が十分供給されるまでの間、1個81mm迫撃砲中隊の代わりに、3個のブリクシア小隊から成る軽迫撃砲中隊が配備されていた。戦争の初期の段階では、イタリア軍は旧フランス軍の60mm迫撃砲も受領していた。

戦争の進展とともに、この迫撃砲は前線で使用されなくなってきた。特に1942年以降の北アフリカでは、最前線で戦う師団にはほとんど見られなくなっていた。しかし、1943年に連合軍としてイタリア軍が再編成された際、各大隊には18門のブリクシアが配備された。多数のブリクシアが、他のイタリア製支援火器と同様に、パルカン半島でパルチザンに使用された。



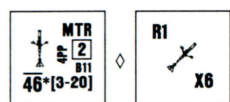
●**Cannone da 75/27**: この砲は多くのイタリア軍師団の砲兵連隊における標準的な軽野砲である。ゲームのカウンターは、実際にはゲームでの性能や歴史的な役割がほぼ同じである4

種類の異なるWW1以前の砲をまとめたものである。すなわち75・27 (27口径75mm 砲) m06 (1906年型)、m11, m12, そして77/28である。m06はドイツ・クルップ社の設計をライセンス生産したもので、そのうちの51門がイタリアで改修されm12となった。m11はフランスから輸入されたもので、世界初の分割式架尾を備えた野砲として有名である。77/28はチエコ・スコダ社設計の野砲・山砲である。リビアのイタリア軍2個師団に、いくつかの他の砲とともに実戦配備された。1940年半ばには3,091門 (リビアの499門とイタリア領東アフリカの24門を含めて) の75/27が陸軍配備されており、加えて245門の77/28も有していた。1個砲兵中隊はこの砲4門から構成された。スペイン市民戦争では、いくつかのナショナルリスト部隊が師団砲兵として75/27を用いた。

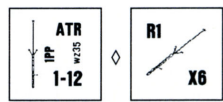
†HEATは1942年9月から使用可能となる。このことは“S2+”と記載されている。

†東アフリカ: 1940年6月 - 41年6月(1.3), 41年7 - 11月(1.4) その他の地域: 1940年6月 - 43年9月(1.2), 1944年 - 45年5月(1.4: ファシストのみ使用) BPV=25

ポーランド軍砲兵器ノート

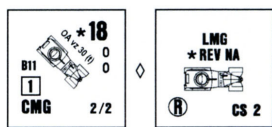


●**46mm 迫撃砲 wz.36** : wz.30 および wz.36 は、歩兵および騎兵部隊に火力支援を与えるためのものとして配備された。これらの小さな 46mm 迫撃砲は、ポーランドの設計であり、0.76kg の砲弾を発射できた。1939 年までに 3850 門が生産され、各歩兵中隊につき 3 門、師団には総計 81 門が配備されている。



●**“Ur.” wz.35 対戦車ライフル** : しばしば、当時において最も成功した対戦車ライフルと評されている。このポーランド製 7.92mm wz.35 “Ur.” は、諸外国のほとんどの ATR より大幅に軽量で、なおかつ副次口径（すなわち、APCR）弾薬を用いた先駆的存在であった。後者の特色は、直ちに他国軍の ATR や対戦車砲にコピーされた。高初速であるにもかかわらず、その比較的小さな口径と軽量の弾頭が、この兵器の ATR としての有効性を損ねていた。この ATR は、1939 年当時に遭遇したドイツとソ連製 AFV のごく薄い装甲板に対して APCR を用い、有効性を示した。3,500 丁が生産され、『ウルグアイ製ライフル』とラベルされた箱に梱包されていた（“Ur” の略称はそれが由来である）。実際に戦争が始まるまで部隊に供給されなかったが、通常のボルトアクションライフルと同じ撃ち方だったため、単純な訓練と実戦での使用によって十分に機能したのだった。

スロバキア／ルーマニア軍車両ノート

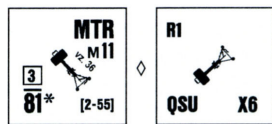


●**OA vz 30(t)** : この装甲車は、チェコスロバキア陸軍によってのみ使用する目的で、タトラ工場で設計された。3 人の乗員で操作され、取り分けて高速でもなく後進駆動機能も備えていなかった。1930 年代におよそ 50 両が生産され、砲塔と車体に 1 丁ずつの 7.92mm 機銃を積んでいた。1939 年 3 月にドイツ軍に 24 両が接收され、うち 7 両は戦場プロパガンダ部隊の無線機運搬車として利用された。13 両が、ポーランド侵攻に参加することが決まった後、スロバキア軍に配備された。それらの車両は、バルバロッサ作戦時、スロバキア快速師団に使用された。また、1942 年 6 月から翌年 1 月までのウクライナにおいて、対バルチザンの用途に 6 両が使用されている。1944 年 8 月のスロバキア蜂起時にも何両かが使用された。ハンガリーが 1939 年の初頭にロシア西部（ルテニア；Ruthenia もしくはルーシ）を占拠した際、10 両の OA vz 30 を含む旧チェコ軍装甲車がルーマニアに逃れ、そこで使用されるようになった。

†故障ナンバー B11 は、CMG と BMG の両方に適用される。このことはカウンター上で B11 が赤く印刷されていることで示されている。

†1941-45 年(1.5) BMP=18

スロバキア軍砲兵器ノート



●**80mm 迫撃砲 vz.36** : この迫撃砲は 1936-39 年にかけてスコダ・ピルゼン（ピルゼン）工場で生産され、そのうちおよそ 150 門がスロバキア軍に使用された。機動師団、および保安

師団のどちらにおいても、この砲の中隊は 2 個小隊編成であった。機動師団の迫撃砲小隊は 3 門の迫撃砲を装備し、運搬はトラックによって行われた。保安師団の迫撃砲小隊は 2 門の迫撃砲を装備し、運搬は主に馬車によって行われた。第 1 スロバキア歩兵師団の迫撃砲中隊は、各小隊につき 3 門の迫撃砲を装備していた。

†1939 年 - 44 年 8 月(1.0) BPV=28

H 章への補足について

H 章で追加されている青字の補足のほとんどは、訳者自身の趣味による、余計なお世話的内容にすぎません（一部は完全に抜けていたものの補足です：例えば 3 号 F 型の BPV や、M4A2(76) のレンドリース総量など）。ただし、一部はオリジナルの内容への『追加』ではなく、『変更』になっています。例えば Tiger I の師団所属中隊の登場時期の一部が 1943 年の 7 月になっていました。これだとチタデレ作戦からの投入ということになりますが、これらの 4 個師団はいずれも 1943 年 2 月から 3 月のハリコフ攻防戦に参加しており、そのティーガー中隊は少数ながらも卓越した働きを見せたのです。また、BT、および IS 戦車に関する補足は、ASL が最初に出た当時と今の旧ソ連の情報公開量の違いによるものです。最新の研究ではまた違う内容になっているかもしれません。ゲームのルールに関する部分ではないので、異なる史料をご存知の方も「プレイには支障なし」とお考えください。また、今回はアメリカ軍 60mm 迫撃砲の OBA 転換ルールを割愛しています。SK では全く使用されないにも関わらず、内容量が多すぎるからです。

カウンターへの補足説明

SK#1

- ・アメリカ軍 HMG に記載されている .50cal は、その MG の口径であり、他の MG よりも装甲貫通能力に優れていることを示しています。
- ・ソ連軍 MMG に記載されている no dm は、その MG が分解できないことを示しています（SK では無視）。
- ・SK#1 にはターンマーカーが入っていません。

SK#2

- ・青い 1/2 捕捉カウンター『B』の表面の ID が『A』になっています（ミスプリント）。
- ・ドイツ軍 Sgt Stahel 8-0 指揮官の混乱面の士気値が 9 になっています（ミスプリント：後の版で是正との情報あり。未確認）。
- ・BAZ45 は弾薬欠乏ナンバー 6 で WP 弾を射撃できます。WP6 がそれを表わしています。
- ・いくつかの砲にある A・D・C は特殊弾薬の略号です（SK では C を無視）。
- ・S13 のプレイには、ドイツ軍 548 分隊が 1 つ足りません（ミスプリント）。

SK#3・EXP#1 共通

- ・麻痺 (STUN/stun) カウンターの裏面には +1DRM が適用される事項が列挙されています。このうち OVR は蹂躞攻撃（オーバーラン）を意味していますが、SK に蹂躞攻撃のルールは存在しません。
- ・走行不能 (Immobilized) カウンターに、TC、および D5.5 の記載がありますが、SK では無視します。
- ・いくつかのアメリカ製 AFV の裏面に “G” と書かれているものがあります。これはジャイロスタビライザーの装備が可能であることを示しています（SK では無視）。

EXP#1

- ・連合軍中小国の新兵 (G) 分隊のうち、B、C、D の表面 ID がありません。
- ・車載兵器の故障／使用不能 (Malfunction/Disabled) カウンターが、通常と表裏が逆になっています（実用上問題ありませんが、SK#3 のカウンターと併用するときに間違えないように注意する必要があります）。
- ・イギリス軍の指揮官カウンターに 6+1 が入っていません。

SK#1~EXP#1 共通

- ・DC カウンターの射程 1 は、隣接ヘクスへの攻撃を示唆するものであり、射撃の射程ではありません。裏面の Throw : +2/+3 Set: 36FP は投げ込みや設置などの使用に関してです（SK では無視）。FT/DC カウンターの Δ は、指揮修整値適用不可の記号です。
- ・PIN カウンター裏の SF に該当する用語は “Street Fighting (街路戦闘)” ですが、SK には該当ルールがありません。RF (Reaction Fire ; 対応射撃) と読み替えてください。IF は砲の追加射撃のことです。

※SF が “Street Fighting (街路戦闘)” を略したものであることは、舞方雅人さんが MMP に直接確認してくれたものです。ご協力ありがとうございました。

カウンター凡例

